主幹・麻生路郎

川柳雜誌

九月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和四年九月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌　第六卷第九號

川柳雜誌社發行

柳珍堂忌

▼日時　九月七日(土曜)午後六時半
▼場所　南區清水町電停西入北側　端の坊
▼兼題　「米」　三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大に歡迎す

柳翁忌

▼日時　九月二十一日(土曜)午後六時半
▼場所　南區清水町電停西入北側　端の坊
▼兼題　「先生」　三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第六卷第九號　目次

感想・評論

もの申に　蛭子省二
句評つてものは　相元紋太
トルストイと川柳　櫻井圓角

研究・其他

新譯詩と川柳　松盛琴人
「の止」と「結語」に就て　出口雨町
老酒甕を抱いて(二)　竹内多聞
洲本吟行　淡路の夏月　路耶紋太素人
評(前號と前々號)　山雨樓ひろし琴人
川柳類題索引(六)　ひろし加香欣女

BUILDING

家　福田山雨樓
ラピ　岩本素人
黃吻錄(其二)　蛭子丘町
きんまんもん　關省二
無花果　本雅幽二
汽車の中　井たけし
病癖の文と句(二)　岩
腕時計　大崔文
しやん　石島芳
選句發表前後　和田悟空
おさんどん　源坊
二上山上にて　上田柳影
一路集(募集句)　植田湖舟
倉　庄萬よし
蜂
耳隱し

青明忌　楊井二南報
各地柳壇　二柳子
飛燕往　路生
杭全町MEMO　柴谷柴舟
編輯後記　小出檜重
忠兵衛(表紙)
題字

創作

近作　麻生路郎
川柳塔　松丘町二
岩本素人　松盛琴人
水谷鮎美　中島鐵洲
出口雨町　住田亂人
伊藤愚陀　酒井駒人
伊藤綠之助　高見柳骨
朝田新水
橋本二柳子
○
島田翠峰　中澤濁水
平田梢雨　安西杏三
土井文蝶　水田桐郎
櫻井圓角　木山青砂郎
中見光路　西村市公
奥田雪緒　若井たけし
池田雪峰

粒々集

川村花菱　富士野鞍馬
福田山雨樓　諸家
近作柳樽

近作

麻生路郎

お前達は疊の上の資本論
讀んでゐる聲を東西屋が奪ひ
食ふべくもないのに被てる絽の羽織
わかれたらさも思ひ死んだらさも思ひ
椅子ばかり殘してみんな寢てしまひ
ばらが搖れても夜警おのゝく
乳の出る機械に母はなつてゐる
氣にしてるのはおさかなの息のこさ
なすびもおばあさんも小さくなつてゆく

奈良にて

鳩に鹿に龜に緋鯉に養はれ

川柳塔

○　岩本素人

只足の裏だけ白い漁師の子
淋しくて呑めばあしたに殘る酒
喧嘩した斗りの夫婦涼みに出
それとなく女房を色に見せて置く
女優志願裸にされて戻つて來
齒をせゝりくゝ交代やつと來る
お前より馬鹿な女もあるはある
刑務所の留守六燭の下で縫ひ
やけで呑むと知らずやラヂオかける也

○　松丘町二

獲ち得たり道化芝居のエキストラ
藏書印消して家賃に換へてくる
深夜なり時計が銀の鈜をうつ
柔道二段袋のやうな耳にして

○　水谷鮎美

好々爺へちまへ鋏いれに立ち
水菓子の腐つた色も美しく
波間のくらげ戀の姿と見たりけり
梅干のたねがちらばる醫者の庭
罪は消へざり心は坩堝
石鹸の泡も少さく夜業の灯

○　松盛琴人

濱寺に夕方ついて手をつなぎ
撒水車あらあらあらこ皆んな逃げ
恩給は夕顔棚をつくつて居
夕燒けへまだ遊ぶ氣の子が呼ばれ
曳船の鳥羽へかゝりし朝の色

動物園にて（三句）

象の散歩へ猩々拗ねてゐる
禿鷹は見物の目を狙ふやう
夜間開塲虎ねむれねゐ〳〵

○　出口雨町

隣から又鷄の苦情きゝ
口入屋男の方は渉ごらず
女にはなんぼでもある生きる道
こりゞ〳〵の噂をされる腹になり
伯父さんは責任だけの意見をし
掬すれば手の色になる青い水
エミールのやうに育てるつもりなり
失職へ日本晴がつゞくなり
絲瓜たゞぶらりんこして暑いこと
女學校出てから走ることもなし

換算をしてから五百グラム買ひ
夢二の繪すげかへられるやうな首
寶石は小砂利のやうに落ちてゐず
卒業の寫眞も持つて嫁にゆき
教はつた道德は皆さびてをり
椿姫の戀を私は認めたい
斷髮の灰色になる日もあらん
紳士てう名に束縛をされてゐる
逃がされた蜻蛉は無事に屋根を越に
逃げた蟬こんごは高いここで鳴き
保護鳥こ知つてか燕まだ逃げず
よッこらさこらさの型で家鴨逃げ
蝶々こは異つた型で蜻蛉こび
面白く蜻蛉の首は廻るなり
キリギリス見當違ひの方で鳴き
大掃除亭主たゝみを任かされる
段取が下手で暇ごる大掃除
酒飲めばかくも雄辯な我であり
他人から見ればはがゆい叱りやう
重役の禁煙したを茶屋も知り
ステージに足々々がよく揃ひ
相談のごつちでもよい欠伸をし

○　中島鐵洲

庭石の人夫五人へ陽は落ちぬ
殿様の氣性の知れる城の石
鉢植にしたばつかりに水がいり
牡蠣を割りや女房後ろから煽ぎ
此の次に欲しい簞笥の型をきめ
眞實に受入れ難い五割引き
紗の羽織柄を透せた丈の事

○　伊藤愚陀

生活をうたふに黑き屋根の數
表情を殺し麻雀敗けてゐる
處女ですよ童貞ですよ海の色

○　住田亂耽

夕の心トマトの色を見てあれば
白粉くづれも獸的な獸的なをんな
麻雀や宿命の色あでやかに

○　伊藤綠之助

日記帳豫算はこうに超にてゐる
欝噴をはらすビールの咽喉佛

○　酒井駒人

病上り食つてはならぬ物を見る
夕立が止まず新開地夜こなり
眞相を死んでく者に知らせたし
子のために此の貧しさこ戰はん

○　朝田新水

潮風に別莊番は飽きてゐる
雲あつて富士も美觀こいふかたち
證人が潔白なりこ思ひきや
かはる旦那にダイヤを買はし
その趣味は山で食ふてる握り飯

○　高見柳骨

白百合の香りが消にて床に落ち
オールトーキーイエスこノーは皆んな知り
夏休み思想の違ふ兄も來る

○　橋本二柳子

夏の晝手提鞄は儲からず
苦しんだ十圓札こ見にぬなり
白粉が涼しいのかこ思ふなり
避暑こ云ふ程ではないが旅の宿
蚊帳の裾吹きあげられて寢てしまひ

長男誕生の鶴峯君に

父に似て嬉しさがます男の子

◇　嶋田翠峯

親のない子に美しきお月さま
虫鳴けば秋の氣持ちになつて寢る
妾宅に首を振らない扇風機
盗人の番にもならぬ病み上り
男前金に詰ればほつこかれ

◇　中澤濁水

窓へ腰かけて梳子の暇でありいつぞやの仲居女將ですましこみ
ごなたへもまだの扇子を仲居呉れ
三味線の糸の切れ目を跳ねる鯉
會社まで羽織寄越さす用が出來
廻しある金庫の文字に氣を拔かれ

◇　平田梢雨

幸運に慣れしや妻の力なく
妹を伴れて話もなく歩き
明眸を誇るか女悅ばず
凉臺お巡査さんへ席をあけ
末つ子へ父は放任主義を擇り

◇　安西杏三

新藥こ注射で命弄び
處女性を失くしてしやべる女事務

◇　土井文蝶

迫る死も知らず牛は列で着き
むつこしてからの金槌よく動き
疑がへご妻は聖者のそれに似て
クリスチャン酒飲む兄を敬遠し

◇　水田桐郎

貧乏へまだその上が借りにくる
男の兒だけが後妻によくなつき

◇　櫻井圓角

妻や子のお伴していゝ亭主らし
凉しさの高野へしかも夕立す

◇　木山青砂郎

辯解を不孝の裡に入れてゐる
家出した日から新聞取つてゐる

◇　中見光路

子のためこ云へちぐはぐに夫婦住み
罪惡のエキスか燒場脂ぎり
死顔へいゝ往生こ汲みちがへ
半季ぶん妹喋りに歸るなり

◇　西村市公

外人に僕の知らない字をきかれ
養生にならぬこ本をかくされる

折鞄その日いらないものもあり
涙から少うし遠い年となり

奥田　雪緒

◇

線香の匂ひがきつい初の盆
佛壇の菓子へ油蟬がならぬなり
髪立てゝ氣分なりとも若くせう
開幕へ芝居氣分は早く來る
左官まづ大あらましに塗つたくり
氣まぐれのやうに當てさくコンバクト
子の因果母は外へも出ずにゐる

野球大會にて

捕手球を甘ねたやうに歸すなり

若井たけし

◇

闘球盤なごに附き合ふも戀
動物の姿で晝寢してゐる
低級な頭腦に魅力持つてゐる
錯覺が消ゐると部屋にひとりなり
炎天を行つたり來たり撒水車

池田　雪峰

◇

カーテンの白さも嬉し戀なれば
人命をうばひし水のゆるやかに
ごうにでも成れとは損をしたの也
傘持つて居るのも走る稻光り

粒々集

印象備忘

東京　川村　花菱

小女の腕の細さを「藪」に見る
歌舞伎座へ來る圓タクの先拂ひ
人の馬鹿女が一層猿に似る
疑はれながらの女中風呂をくみ
子が二人空地をかこふのを見つめ
二階借でつかい謄寫版を持ち

東京　富士野鞍馬

多摩川を汽車から見れば魚を突き
風呂敷包で關釜連絡
氷切る鋸の音も夏のもの
川開き覺悟はしたが押されけり
暑さの外に滿員の暑さ
椅子三つ並べて横になるも夏

大阪　福田山雨樓

早起きの音につられた鷄が鳴き
まづ金さ何をか言はん靴磨き
忙中閑父隅々へ片付ける
花賣りの捨てごころなき荷が殘り
圓タクへ襟足白し貰ひなる
風あれど星なし糸瓜忘れられ

もの申に手間をとらせる眞ッ裸

蛭子省二

客が歸つた後で、全体一時間許り、なにを語つて笑つたのであらうかと　辿つてみると、辻褄の合はぬ雜駁極まる斷片的のもの許りである。世間咄は皆そんなものだろう。話の解決が一々つく樣では明日のおタノシミとならぬ。私の閑文字はツマラない事を自知して居る。それでも採用する雜誌があり、讀んで呉れる友人がある中は毎日かく、死ぬまでやめぬ、世間咄の種は盡きない、支離滅裂で要領の得にくい處が、私の面目である。書いて居れば自分丈けで氣がすむ、罪のない男だと思つて頂けば、暑苦しくなくてよい。私は眞ッ裸で筆を執りつゝある。

蠅にさいなまれつゝ

一度、蠅叩きをもつて、三十疋は殺す、流石に、蠅にさいなまるゝ朝鮮生活丈けはある。蠅退治の七ッ道具をも揃へて、所に應じ使用する。

禪宗の蠅には負けて拂子をもち　劍花坊

私の机邊にも亦拂子がある。

拂子の先で蠅を押へ腹がすき　省二

柳樽寺の雜誌は、愈々二百號を重ねる。寔に柳壇の驚喜である二百冊のうちで、印象づけられてゐるのが一四五號（大正十三年十月）卷頭に蠅十唸がある。前記の一句もそれで

誅求の天井へまで蠅たゝき　劍花坊

叩かれた蠅繪のやうにへばりつき　同

人間の道德蠅と相容れず　同

なぞがある。私は今、蠅族の中で、柳樽寺が多年の奮鬪＝建設的な勞苦＝に、此の僅かなる追憶に因つて、祝意を表して置き度いと思ふ。

蠅が息するひでり米の値を知る　省二

蠅を叩いて障子の破れ風ありぬ　同

蠅をにくむ心へ桔梗ゆれてる　同

フアブルなら蠅を愛したかも知れぬ、否崎一秋、は竹皮の蠅打を

こしらへて、折々座右を打ならせば、世にいふ唐鐵砲の心にて是を蠅打ともいふべきや、蠅拂ひといふべきや、卽ち其柄に銘じて曰く

殺すなかれ　敵はふせぐべし
打事なかれ　蠅ははろうべし
胡爲不仁なるやと
與叔が克己の銘にあり

と書いては居る。蠅は手をする足をするの道句と俱に道學臭ひ、川村瑞軒は裏町の塵芥場から、人のすてた古雪踏を拾集めては、河で洗ひ竹の柄を添えて、蠅叩き〳〵と、街に賣つて儲けた。唐には歐陽公作の憎蠅賦がある。わが清小納言は

蠅こそにくきもののなかに、入れつべけれ、あいぎやうなく、憎きものは、人々しう書き出づへき物のやうにあられど、よろづの物にゐ、顏などにゐれたる足して、ゐたるなどよ、人の名につきたるは必すかたし。

と穢らはしいものにして居る。蠅麈などいふ名は、聞くだに疎ましい。古も物好きはあつて＝此頃の川柳家の號の樣に＝愚かな名などつけたらしい。蠅を讒人に比した事は五雜俎にあつたようだ。

『後の世、蠅さむまれて、風雅に不信第一の人ぞすべし』とはやたらに厚味を求むる、蠅のやうな俳人柳士への戒めならむも、生活難をかこち、更に餘裕なき鬪爭をのみ繰返すも亦、次の代蠅ぞ生れて浮ぶ瀨がなからう。

留守居するビールの泡に蠅が交る　舍二

米壽榮食主義

友人を介して依賴をうけた、榮食主義の八十八翁に、一句を寄せて呉れろと、非常に元氣で三十は若くみゐる。榮食の効能であらうといふ、私は此種の御所望＝或は結婚出産の祝吟＝にはかなり接してゐる、且つ全く知らぬ人への句といふ事は、いかにお目出度しとするも、切實な迫られた感激があるのでないから、自ら滿足する態度にはなり難い、然し句が出來ないとせば、己を物足りなくも思ふ。

單衣羽織の八十八で茄子きうりを食ふ

こう直接短冊へ筆をおろした、もつと推敲すべきであるが、すればヒネクレるかもしれぬ、危みつつ此儘にしてある。二三日短尺懸けに挿むで置こう、

爰にも、課題是非論の、一部の鍵鑰があるようだ。

×

米壽の古川柳は、頗る多い、

八十七は手をあてる年
八十七もなぶらるゝ年
八十七は慾の出る年
八十八はうま過ぎた年
大助に十八下で祝ふなり
大丈夫米を三つにかみくだき

夜航詩話に、『邦俗八十八を稱して、米年と爲す、亦未だ典な

らずと爲さざるなり』で、四十より百に至る年賀の外に、齋數ならっる八十八をも祝ふ風習は、江戸時代に及むで、尤も盛むにはなつたが、必ずしも新しい事ではない、橘窻自語六に『四條隆蔭卿、權大納言正二位にて八十八歳の時、依敕米字書之、請人貴賤八千七十五人に及べりときき傳へたり、延文年中、すでに米字をかゝことありとみゆ』と、尚ほ煙霞綺談には、『遠州中泉に相場彦兵衛といふ者、夫婦ともに八十八歳にて、去々年子の春八木の守りを出す、夫婦一紙に文字をならべ書して諸方へ賦りたり、世間に夫婦同年は忌嫌ふ事といへども、かく長壽を保ちて、人のうらやむを思へば、俗説に泥むべからず』とある。

一説にヨネ（米）とは八十の人と書くので、八十八は民間の俗習であり、堂上では八十であるともいふ、四十二の賀は厄年六十一の賀は本卦返で、算賀の意ではなく、喜壽米年は、七七及八八の重なるを喜ぶから、起つた事も、理由の一つとはなろら、傳説としては、天寶年中雲南役に上つた男が、命が惜しくなつて、自ら臂を切り、鄉里に歸臥して八十八迄の、長壽を保つたに因るとある。

米といふ字を三つにわり餅をつき
さて若いお手と壽の字の餅をほめ
壽を祝ふ餅のひわれも龜の甲

餅の禮大きく耳のそばで言ひ
大福（紅がらでかく伊勢屋の賀

賀には紅白の餅や饅頭を、或は未廣に壽の字や米の字を書いて配る、例となつて居る、饅頭は滿十の謂を含む、餅は正月に造るのも同じわけで、

賀の餅を腰もつよいとほめてくい

の狂句觀もあろう、貞丈雜記には、年の賀の祝物に、饅頭に紅にて壽の字をかく事、近代の例なりと　四條流獻方五傳書に見ゑたり、貞丈云く、饅頭に不限、盃其の外、壽の字書く事、皆近年の風俗なり、人の好みにてする事なり。

來年を苦にする無筆八十七
おしい事八十七の能書なり

米をシオとも讀む、『和名抄に秔米を宇流之禰とあり、清輔朝臣の歌に、おしねかる賤のすか笠白妙にはらひもあへずつもる雪かな、晩稻を略きて、おしねといふ』、これは死に通ずるから、大に忌む。よねと讀まねばならぬ。

百迄は受合ふ御手とほめてくい

今秋御大典の際の統計には、百歳以上は二百六十一人と聞く。

九十九は嘘の冬瓜の咲いてみせ
九十九の人は大かた口ばかり
百ときいては凄くなる年

「る止め」と「結び語」に就いて

出口雨町

（一）

『る』止めの句に對する飴ン坊さんの御批評から端なくも宮津の啞亭氏との間に異論を生じ三ケ月に亘つて『葵』誌上を賑しましたことは諸君の御記憶にもまだ新しいことゝ思ひます。しかし、果して飴ン坊さんのおつしやるやうに『る』止めが一考さるべきものでしやうか　むしろ私はこゝに『る』止めの迚も非難さるべき餘地のないことを感じたまゝに書いてみたいと思ひます。

ライスカレーで得られる戀と思つてる　蝸牛

この句に對して飴ン坊さんは次のやうに言つて居られます。（本誌二月號參照）

『この句が『る』止めでなかつたら一層の緊張を帶びてくると思ひます。『る』止めは句勢を弱めると思ります。それから又『る』止めは文藝的ニホヒが稀薄だと思ひます。で工夫の足りない叙法だと云ふ結論になります』。……

右の文中繰り返してゐられる『思ひます』と云ふ言葉は獨斷を避ける意味に於いて最も安心深い叙べ方でありまして、これにはごうも戈鋒を向けることが出來ません。しかるにその後へ『……結論になります』と肯定してをられる。つまり『思ひます』から何時のまにか結論が飛び出したのであつて、こうしたイロヂカルな論法は明かな誤謬です。從つて以上は『る』止めを難ずる何の理由にもならないのです。

尙言葉を續けて……

『關東の作家には『る』止めの句を作る者が、ほとんどないのに、關西の作家からは、あまりに多く見せられます。』とも言つて居られる。

しかし東京の作家の句にもこんなのがあります。

喫茶店蚊いぶし程にこもつてゐ　○　錢（いやな奴である）

又古川柳にも澤山る止めの句がある事も言ふ迄もありません

續いて飴ン坊さんはこう言つて居られます。

『これは常用語の影響からで致し方がないのでありませうが句品の上からは言葉は國の手形を離れて研究すべきものであらうと思ひます。』

至極ごもつともな御言葉です。しかし『る』は決して常用語では御座いません。川柳以外には絶對に使はれてゐないところの文法に適つた立派な動詞の一活用です。

（二）

一般に川柳の、『結び語』の中の動詞、形容詞が終止形で終る場合は往々にして、その句に散文の一齣のやうな感を起させます。そこで川柳には特に動詞、形容詞はその連用形を用ゐて

句を引締る方法をこつてゐるのです。これが川柳の形式上の一特徴であります。又これを句の内容から言ひましても、一層の皮肉味を與へてゐるやうに私は思ひます。

過言ではありません。私は川柳の殆んど半數がこの連用形で締つてゐると思ひます。

勸誘員材料になる悔みに來　志郎
内緒金妻が脱がせる服で鳴り　同
邪魔がられながら本妻又孕み　同

いづれも七月號の近作柳樽に選拔された句です。これを見ても『連用形結び』が如何に多く使はれてゐるかゞわかると思ひます。で私の言はうとしてゐます『居』も右の『來』とよく似た動詞で『居る』の連用形に過ぎないのです。私はこんなことは分りきつたことだからくどく書く必要はないと思つて居たのです。がはからずも、先日古本屋で木村半文錢氏の『川柳作り方新研究』を覗いて、意外な文字に接しましたので、急に書きまとめる氣になつたのです。

同書の中で氏はこう述べて居られます。

『短い詩型であるから止むを得ませんが、よく川柳語として用ゐられるのに『居』と『來』などの詰つた語句のあることです。普通では『居る』とか『來る』とかしなければならないのに、それでは字が餘りますから、これを詰めて『居』『來』などの無理を生じたのであります、』と。

この滑稽なお說に、どんな根據があるのか知りませんが、これによつて考へますと、飴ン坊さんの、おつしやるやうに『る』止めは緊張味がないと云ふことになるでしよう。しかし愚見によりますれば返つて『る』止めは句を引締める事になるのです。

科學には例外と疑問とを忌避し、理論を系統だてる爲に假說と云ふものがあります。無理な考へ方をせず、例外なしに、總ての現象を說明し得たならば、その假說はつひに一つの法則になるのです。

これと同じやうに以上私の申しましたことが、たとへ私一個の獨斷でありましても、これによつて『常用語』だとか『無理な語句』だとか云ふ特別扱ひをせずとも、例外なしに一つの法則に統一し得る利益があります。

（三）

以上二節で私の言ひたいと思つてゐましたことも、ほゞ盡されました。しかし本論に關聯したことについて、もう少し駄筆を許していたゞきます。

眼ざむれば床の椿の落ちてゐる　木偶人
空ら電車ゼリーピンズがこぼれてゐ　五輪

これを要するに十七字に合はすために、ある時は『ゐる』にし或る場合は『る』止めにするだけのことです。句品に何の變りがありませうか。

私は前節に於て終止形の『結び』は散文の一節のやうな觀があり、連用形の『結び』は川柳（狂句等も含む）獨特の用語であると申しました。

早い話が右の木偶人氏の句を見ましても『椿の』を『椿が』に變へたならば成程と云ふ感じが致します。この句は説明的叙法に陥りやすい『が』と云ふ助詞を避け『の』に代へられたことによつて一層詩的に生きてゐるのです。

小使に聞けば戀中知つて居り　柳月坊

こう云ふ結び方をよく見受けますが、これも普通なら『知つてゐる』とやるところです。私にはどちらがよいのか、はつきり解りませんが、或は作者は、意識的か無意識的にか、散文まがひの終止形『結び』を避けやうとなさつた結果ではなからうかと思ひます。即ち理窟を許していたゞくなら、この句は『る』止めにすれば十六字になつて調子をこわしますから『居る』と云ふ四段活用の動詞を借りて來て、それを連用に働かせた例なのです。又句の場合によつては終止形に結ぶ方がよいこともあります。

上役は肩をたゝいて用を云ひ
九人まで一萬圓でよいと云ふ　同　觀月

これは最も賢明な使ひ別ではないでしょうか。

貞淑な妻を叱つて氣が晴れる　善治

拙吟ですが、獨身のくせに主觀的に取扱ひたいため、こう終止形で結んでみたのです。

それから『る』止めと同じやうによく使はれるのに『る』があります。例へば蝸牛氏の句を『ライス・カレーで得られる戀』とか云ふやうな靜的な動詞に表現効果や働きを求めるのは、ちと無理な注文だと私は思ひます。

が、この『る』は『居る』の『る』が詰つて略されたものですから この『る』こそ飴ン坊氏や半文錢氏の所謂『常用語』であり『略語』であるのでございます。

『居』と同じ活用に屬する動詞には、なほ『見』『着』『射』等があります。

休日の己が職場を汽車から見
樂しみのなさそうな家汽車で見る　游二郎　水府

たゞ『居』が靜的な動詞であるに反して『見』『射』等が活動的な動詞であると云ふだけが相違點であります。故に『居』止めを難ずる人はよろしく『見』止めも非難なされて然るべきでしょう。

次ぎもやはり飴ン坊さんのお説ですが。

新妻一人錠を下して靜かに居　南窓

『この句から『に居』の二字を省いても現の正鵠に影響しないのを見ても『る』止めの價値は考究すべきものではありませんか。』

このことだけは少し事實のやうですが、それは『る』の缺點ではなくて『居る』と云ふ動詞そのものゝ缺點なのです。本誌五月號の月評でも、これが問題になつてゐました。だが、之とても何も京郎君の『笑はせて功德したよな顔でゐる』に限つた問題ではないじやありませんか。そも〳〵『ゐる』とか『ある』とか云ふやうな靜的な動詞に表現効果や働きを求めるのは、ちと無理な注文だと私は思ひます。

月評（前號と前々號）

路郎　紋太　素人
山雨樓　ひろし　琴人

近作柳樽（七月）山雨樓提出

銀指輪死ぬる病と知つて居り　雨眠

山雨樓……何だか作つたやうな句のやうにとれるが、銀指輪を捉へた事はこの句を素晴しく價値づけてゐるやうに思ふのみならず句の眞實性をも深めてゐるやうにもとれる。所謂情緒もあり、背景もあり、しんみりとした感じを與へて居る。

紋太……僕は餘りこの句をほめたくない。死ぬる病と知つて居る事が、既にあはれにはかない氣持を與へられる上、銀指輪と言ふ實物に於て亦文字にしてよんでみても、その哀れにはかない氣持にぴつたり合ふた上五を持つて來たのはさういふしんみりした句を作る手段として成功した句であるとはいへやうが、その事實を考へた時にかうした他事のやうな、或ひは寫生したやうな叙法で表現する事は考へものではないかと思ふ。何だか空々しく悔みを言つてゐるのと變りがないと言ひたい。

素人……松山に住んでゐる私は、はからずも松山の作家が提出された事に興味を持つてゐる。この句に紋太氏の言はれたやうな缺陷は多分に含まれてゐるが、松山柳壇としては非常に珍しい傾向の句なんです。之を第一歩として松山の柳壇の句がかういふ傾向に進んでゆく事を僕はのぞんでゐる。そしてこの作家は非常に古い俳人で、最近に川柳を初めたかなり年輩の人ですが、こゝ迄川柳をこなしたと言ふ事は、その事情を知つておる僕には多分の稱讃に價ひすると思ふ。

琴人……紋太氏のお説を考慮に入れても、この句は私はいゝと思ふ。欲を言へば素人君の「夫婦默りアルミニウムの唯白く」の行き方にやつたらこの句が尙一層よくなるだらうと思ふ。

路郎……勿論この句が佳句である事には異存がない。先程から山雨樓氏と紋太氏との主張の相異點を考へて見ると、小説と自叙傳との相異に類する相異が、その論點の中心點をなしてゐるやうに思はれる。この問題は川柳にとつてかなり大きな問題であるやうに思ふが、現在我々のとつてゐる態度は、その何れをも認めて川柳圈内に入れて居るのであるから、この句もその點から見れば佳句として推奬してよからうと思ふ。

ひろし提出（八月）

出稼ぎへ父の命日とくにすぎ　敏郎

ひろし……高野岩三郎氏の人口論をきくと働き盛りのものを移民する事は人口過剩を解決するものでないと言つてゐる、所謂殖民政策の爲の犧牲になつて南米等への移殖民の悲哀がよく味はれてさうした帝國主義者に頂門の一針を與へた氣持がする。勿論この句はそんな意味で作られたものではないと思ふ。

路郎……僕は出稼ぎをした經驗はないが、長くあちらに居られる人達にとつて、よい事があるにつけ、悪い事があるにつけ、亡き父の事が偲ばれる。その時にふと氣づけば命日がすぎてゐたと言ふやうな寂しい感じに囚へられる事がまゝあるであらうと思ふ。恐らくこの句は作者の實感から生れた句ではあら

うけれども、輕い意味の穿ちの句として考へてもうなづける。それ程實感味が出て居る佳句だと思ふ。更にも一つこの作者の句で見逃し難い句がある。それは「上着ぬぎ又チョッキぬぎ鳥の聲」と言ふ句で、之等も異國の廣々とした所で立働いてゐる人々の 情景がよく出てゐると思ふ。

琴人……この句を見ると、その半面に如何に現代の生存競爭が激しいかと 言ふ事がうかゞはれる。

素人……出稼者の口からでなければ 出ない句だらう。私のやうに內地で出稼ぎばかりしてゐる者にとつては有難い句だ。句の仕立て方から言ふと「さくに」と言ふ事が餘りに輕卒な言ひ方だらうと思ふ。

紋太……出稼人の寂しさをうたはう として居られるのかとも思ふが、句の叙法からうける感じは、その寂しさは感じる事が出來ない單に穿ちの句としてうけとれるだ けである と思ふ。穿ちであれば僕はこう直したいと思ふ。「出稼ぎへ父の法事がとくにすぎ」何だか文字にこだはるやうだが原句のまゝだと私の考へに合はない。命日であれば素人氏の言はれるのに同感する。

路郎…… 僕はこの場合の命日は 祥月命日であつて、他國で殊に生活樣式の違つた國で慌しく、或ひはのんべんだらりとくらしてゐるとしたなら、ふと氣がつけば父の祥月命日が一ヶ月も二ヶ月もすぎてゐるやうな 事は珍しくないのであらうと思ふ。紋太氏の言はれる法事と言へば、或ひは三回忌とか七回忌とか言ふやうな年忌を意味するやうに思へる。この場合はやはり命日の方が「迅くにすぎ」でいゝのであらうと思ふ。

ひろし……僕は息子が出稼ぎに出かけ 國に殘した父親が死んで墓を拵へるから 送金をしろとか 物入りをしたから金を送れとかいふやうな便りをうけて居ても、思ふやうな金が儲からないで悶々としてゐるうちに、一年が經つてその命日が既に 經つたといふのではないかと思ふ。

山雨樓……穿ちの句でも 自分の心持をふりかへつて見た場合には、他の悲愴な穿ちを捉へた場合よりも、人に迫るものが多いだらうと思ふ。この句の場合も先程路郎師が述べられた。祥日命日の事をうたつたものとしてはるか海の彼方からよびかけてゐる 同胞の心情を察する事が出來るやうに思ふ 之は眞實の力强さに外ならぬのであらうと思ふ。併し川柳としてその出發は 誤つてゐないにしてもその進路に於て 幾多の廣さ深さがある事は勿論である。

琴人……この間私の知つてゐる宗教家が、出稼地米國のあらゆる所へまはつて 來て言ふ話には、あちらでは盛んに握手をされた、すると掌がとても堅くて 手が痛くなつたと言ふ話でとても內地の人間の想像 にも及ばぬ手を持つて居た。さういふ事を私が今考へてゐると 命日がとくにすぎと言ふ事は實際あり得べき事でこの句はそれだけでも 價値があると思ふ。

紋太……しつこいけれども もう一言すると前句が路郎師の言はれるやうな 想の句であつて欲しいと私も思ふ。若しそれであつたならば出稼ぎへ等と句としての 面白味を添へやうとしてほしくなかつた、私はこの句がわるいと固持するものでない 惜しいと言ふ意味である

山雨樓……僕は紋太氏が、句會での課題吟によりよき天の句を求められやうとする 熱意に對して敬意を表する。然しその心持が句會ならぬ句の上に及ぼされては しないかと案ずるものである。勿論川柳の手法 技巧 或ひは推敲といつた事は如何なる 場合に於ても必要であるけれども、實感の前にはおかし難い力强さをどうする事も出來ない 場合があるので、その實感を如何に現表するかと言ふ事と實感以外のテーマを織り出すと 言ふ事は別々に考へるものではなからうかと思ふ。それは川柳は必ずしも實感 でなければならないといふ事でなく、實感により强き根ざしがあるのだといふ事を 第一に考へたい爲である。

素人提出（八月）

手術前ふとあの山の名をたづね

天　絲

素人……ふとと言ふ言葉を使つた 句に今迄適切に「ふと」を使つた句が少ないが、之は適切にふとを使つた句だらうと思ふ。手術する前に自分が死ぬるかわからぬから 色々なものをきくと言ふやうな氣持でなく、ふときいたといふ氣分がなにやらしつくりす るやう

に思ふ。

紋太……僕も靜に緊張したいゝ句だと思ふ。路郎……手術といふ事と山といふ事とは非常にかけはなれた事でもあるし、又特に聯絡を持つたものでもないのに、然もぴたりとその時の感じなり情景なりを想起させた所にこの句の妙味がある。

琴人……これでいゝでせう。

琴人提出(八月)

親類は悲しあをゝとある
密柑の木

鎌　月

琴人……大變いゝ句だ。「親類は悲し」で何か親類へ頼み事に行つてきゝ入れられず その家を出た時にふとみかんの あをゝとした木が見えて、自分の資産の悲しさを運命的にあきらめて居る氣持がよく出て居ると思ふ。自分を悲觀した氣持が善人的に あらはれてゐる。―人を恨む氣持でなく、自分の資産をあきらめて居る氣持がはつきり 私に判ると思ふ。

ひろし……頗る同感

山雨樓……「あをゝとある密柑の木」は實によくうたつてある。併し悲しといふのがはつきりしないと思ふ。

琴人……悲しみが生命ぢやないですか。

ひろし……「悲し」で琴人氏の いはれる如き意味がわかるやうに思ふ。

素人……金持の親類に對して、貧乏人が見た句に違ひないが、よりつけない程懸隔のある―物質的にも思想的にも―家の前を通りすぎる場合をうたつたものぢやない かと思ふ。

琴人……眺めたばかりでは この句は生れないと思ふ。

ひろし……悲しは涙を流すといつたやうな悲しさではない。

路郎……かういふ句は説明すると 段々わるくなる句ですな。

山雨樓……併し悲しは適切ぢやないと思ふ。

琴人……悲しの受入れ方で違つて來る。

紋太……作者は親類が無心とか 相談とかをうけつけて呉れないとか、事件的な事は別に知つて貰ひたくなく寧ろさういふ 事は隱して居るやうな氣持で この句をよんでゐると思ふ。只自分の寂しい人生をうたつて、その寂しさだけをうけ入れて貰へば 滿足すると言ふ弱々しい心持であらうと思ふ。そして僕はそのさびしさを感じさせられる。

川柳塔(七月)　路郎提出

娘の肩の赤き糸屑つまゝれる

鮎　美

路郎……極新しい句だとか 或ひは穿ちの句だとか言ふ方面の句でなくて 柔い感じがよく出て居る本當に可愛いゝ句だと思ふ。

素人……「赤き」は「赤い」の方がいゝと思ひますな。それから、尤も娘の情緒を うたふた句だが、娘に「赤き糸屑」は道具が揃ひすぎて居るやうに思ふ。

琴人……成程柔い感じ 娘らしさはあらはれて居るが、内容がないやうに思ふ。客觀的に見た故の結果だと思ふ。いゝ句だが、どこか物足らない所がある。

ひろし……素人さんの仰せの 娘の肩の赤いとすると、固くなつて柔い氣分を出さうとする句の調子が 悪くなりはしないかと思ふ。「の」が二つ續いた上に 尙ほ「い」をもつて來るとさういふ感じがしはしないかと思ふ。

紋太……僕も赤いより、赤きの方が一層句が生きて來るやうに思ふ。「赤い」とすれば、句に柔か味が出るやうに思ふけれど、「赤き」の場合は只單に一件を述べてゐる丈でなしに、よくその糸を見つめて居る 作者の態度が表れて來るやうに思ふ。僕も初めに見た 時は「赤い」と直した方が、いゝと思つたけれどもそれは今迄の簡單な心持で 作つてゐた句と同じ事になるやうによみかへして、そう思つた。

山雨樓……僕は下五の「つまゝれる」といふ事に作者が作つた後が ありはしないかと疑ふ 成程赤き糸屑はその糸屑なり娘をよく見つめた所はあるけれども、之をつまゝれると言つてしまつては、川柳の常套手段に引きずられる感があるやうに思ふ。作者の鋭い觀察眼は、今正に何物かをこの際つかんで欲しかつたと思ふ。もつともこの句は、さつき路郎師の述べられたやうに、深さを要求した句ではないかも知れぬが、そこに新しい感覺を望みたかつたやうに思ふ。

紋太……つまゝれると言ふと弱いやうである、その裏には「つまゝれた」或ひは現在の氣持が充分にふくまれてゐるやうに僕には思へる

路郎……内容から言ふと娘と母親との平和な生活をよんだものであるけれども、其親子の平和と言ふよりも「赤き糸屑」がくつゝいてゐる。その場合のほんの一寸した情趣に感興をもつた句であらうと思ふ。この作者の深刻な見方の句としては「おかしさは五十の坂の子が戻り」や「さびしくも父は枕を落ちてゐる」の如き佳句があるのであつて、この場合私が提出したのは、さういふ深刻さを取扱つたものでなく先程も言つたやうに可愛い句といふやうなものを見せて呉れて居るのでこの句をえらんだものである。

「赤い」と「赤き」とは先程紋太氏の言はれたやうに普通の行き方であれば赤いとすべきをこゝでは赤きとした爲に句が生きて來たものと見たい。

琴人……今先生がおつしやられたのでよく判りました。この句が提出される前に「さびしくも」「おかしさは」の二句に非常に惹つけられた爲に、この句が内容の點に於てものたりないのを感じたのであつた。…句のいゝ點には肯定するが、

素人……作者が鮎美君の事だから輕卒に「のと」「き」の字をおいたのではなからうと思ふやはり紋太氏と同じやうな氣持でおいたものだと思ふ。皆様のお説に如く「い」は平凡な叙法だが、この句柄の上に矢張り口語体の「い」を持つて行く方が適切だらうと思ふ。

路郎「き」の字は「い」の字よりも固い。その場合に「赤い糸屑」を特に強く引きたてる爲に固いきを用ひたのである。

紋太……「赤い」の場合は、かういふ事もあると言ふやうな句になると思ふ、赤きとしたので作者がそれを見つめたと言ふ氣持がうがゞはれる。

路郎……それから、娘と赤き糸屑がつきすぎると言ふ説がありましたが此場合、青い糸屑でも、白い糸屑でもふさはしくなく、寧ろつきすぎると思はれるだけ「赤」が適切なのであらうと思ふ。その場合、それを平凡とは言つてしまへないものがある。

素人……無論青でも白でも適切でないが、寧ろこの場合糸の色を説明しない方がいゝと思ふ。

さうすれば、糸といふ丈では情緒が出ないやうに思ふが、つきすぎると言ふ感じは私の頭に變りはない。「い」と「き」については、言い出すと僕の言ふ事は長くなるから今晩は「い」の方がよからうといふ事にしておき他日書いてみたいと思ふ。

川柳塔(七月)　紋太提出

家族湯のタイルは白く肌白く

新　水

紋太……「白く」「白く」の重ね方が多少輕つぽい感じを與へる點もあるが、ぢつとこの句を味つて居るときれいな家族湯の内部がうかんで來て「肌」と言ふ言葉も只美しい意味にとれて快い氣持で句を作つたといふ感じをうける。その快さをいたゞく。

素人……成程清楚な感じがしてうまい句だ

新水君の句にしては、行き方の變つた句だと思ふ。難を言へば、どうしても、家族湯に男と女とが入つており、肌の白いと感じたのは男です。平つたく言へば色氣が足りないやうな氣がする。

紋太……僕は男とも女とも思つて居ない。只人間の肌を思ひ浮べたゞけです。

素人……その句からは男とも女とも感じられないが、家族湯とある故に、僕の如き者には、男と女と入つて居て、……それにしては色氣が足りないやうに思ふ。

紋太……色氣を土台におけば、かうは作りますまいれ。

琴人……私の感じは、紋太さんが初めに批評された境地と同じです。さはやかな新鮮な色氣がなくつても、そこにいゝ感じを與へるやうに思ふ。

山雨樓……僕は一寸かういふ事を考へたんですがれ。……今素人さんの説のやうに情緒を求め易い境地に在つて、而も情緒に墮せず卒直な感覺を覘つた所が新しいと思ふ。

路郎……句意は紋太氏の説明でいゝのであらうと思ふが、ぢつとこの句を見つめてゐると、家族湯を本當に知らない人が空想から生み出して來た句のやうにも思へるし、又家族湯そのものになれきつた人がはつきり家族湯を見たやうにも思へる。色氣がないといふ

やうな説が出たが、今いつた二つの中間に色氣があるのであらう。まあ句としては中位のものではあらう。

素人……之では家族湯が生きて來ない。溫泉でもよからう。「溫泉のタイルは白し肌白し」でも一向差支へない。

家族湯が動くと思ふ。

ひろし……溫泉の方がいゝと思ふね。

川柳塔(八月)路郎提出

近頃鶏を飼ふ

バタバタバタ、コケコッコウ
クウ寢て居れず

町　二

素人……之は鶏がうるさいといふよりも、興味と愛着とを感じて居るやうに思ふ。

山雨樓……そこがいゝんでせう。

路郎……そこにこの句の面白味があるし川柳の表現法の自由さも出てゐるし、音響によつて感じなり情景なりを、はつきりと描き出してゐるし、近來珍しい句だと思ふ。といつて無暗に之を眞似てはとんでもない　句が澤山出來ると思ふ。

山雨樓……そこで　先程の路郎師の句のやうにこの句が齎した　實感の方强さといふ事を尊く思ふので、自然と句主の愛着がしのばれて面白いと思ふ。

琴人……同感です。

ひろし……この句の珍しい　表現の點は無論買はればならぬ。又前書附の句としても、上乘のものであらう。併し僕は「日向炎のゆらりと高し年增めき」の洗練味に魅せられる。

路郎……「日向炎」の句はうまいけれども嫌味があると思ふ。やはりこのバタ、バタの句の方が正直でいゝ。

山雨樓……一茶を偲ばすやうな……。

紋太……同じ事をのべるやうだが、この句がなまじい川柳らしくしやうとか　情景をあらはさうとか感じを　出さうとかいふ事を主にしないで、とにかくいはずに居れない事を正直にいふてしまつたといふやうな點　が良いのだと思ふ。ふざけてゐるやでうふざけでゐず、くだけて居るやうで、くだけて居らず正直にいひ放つた點が、この句の力になつてゐる。かうした正直さは、どんな趣向の句にても是非もたせたいと思ふ。

僕が句を作るのに際しても　何時も之をねがけて居てどうしても出來ない。(亂耽筆記)

投稿規定一部改正

▼近作柳樽及課題吟の投句用紙は葉書又は同型の厚紙に限る

(句は縦に書き各題別紙に認めること)

從來半紙又は同型の罫紙と定めてありましたが、半ピラの紙や卷紙のきれつぱしや、甚しいのになると葉書などで投句される方があつて綴ぢて一冊として選者へ送るのに非常に不體裁であり、綴込みに困難であり、選者の方でも選句上大變不便で閉口されてゐるのでありますから、その點をおゝへになつて規定は嚴守して頂きたい葉書は必ずしも官製には限りませぬ。私製はがきであれば從來のやうに他の投句稿と同封で郵送することが出來ます。

訂正

本誌八月號一路集光路氏選、及駒人氏選の左の句は無記名なりしも　右は岡崎桂枝君の句なる由申込により茲に訂正す

光　路　選

地　甲斐性の樣に家出の親は云ひ　桂枝

家出する金とは知らず貸してやり　同

駒　人　選

五者　家出もう他人の飯に馴れ居る　同

▲八月號の二五頁「アスハルト裾を押へる風が吹き」繁坊

句評つてものは

椙元紋太

◆句評つてものは例へば親仁のする意見みたいなものだと僕は思つてゐる。お手許拜見と出掛けたなら親仁さんたぢ〳〵とするだらう。親仁のいふ事によし間違ひはないにしても、それが此つ方の塲合に當て篏まるか何うか判らない。此つ方の心持も察して吳れないで世間並の型に宛がをうとする。親仁の虫の居處によつては飛んでもない劍突を食はすだらう。手前の思ひ通りに矯めやうとしてかゝる。假に少しの理解がある塲合にしても到底親仁は親仁である。親仁としての心持を迹べて引下つて吳れゝば可い方である。句評つてものは、褒めることより貶す塲合の方が多いのだから、句評つてものは雷の樣な劍突は吳れても恁うしろと柔かに敎へて吳れることは尠いから、句評つてものは濟んでしまつたことにくぢ〳〵と餘計なことを付加へるから、句評つてものは我田へ水を引くから、だから句評つてものは親仁のする意見みたいなものだと僕は思つてゐる。言はれた由りに中々出來るものか。參考に聞いて置いてやる。

◆七月號の近作柳樽を讀んでゐるとこれは古いなと思ふ句がある。意味の汲みとり兼ねる句もある。幼稚な句、氣取つた句もある。然し相手は雜吟だ、創作だ、氣にすることはない。それで眞實であり、眞劍であり、力一ぱいであればよいのだ。出來たものは駈引のないありの儘な、所謂矢折れ力盡き、人事を努して天命を待つていの氣慨の表れであればよいのだ。自分と出來たものとに間隙のないものであればよいのだ。そのあとの品評はするものに委しておく。卽ち劍突であらうと、彈壓であらうと、高慢であらうと、嘲罵であらうと、參考の爲めに聞いて置いてやるだ。

◆木偶人氏の『双腕を伸ばせば夢に欺かれ』は絢爛目もあやなる叙法だ。斯くも巧く言へるものかと感心する。夢中から現實に還つたの謂ひだらう。想は簡單だが言葉が活きた。文芳氏は

松山の人、松山には昔から柳人雲の如くある土地柄だ。川柳雑誌の支部が出來て時折老練な作家の名を見るのは愉快だ。『御詠歌の節と革新派が生れ』は簡單にほゝ笑ませる。『ポスターに春は今年切りのやう』は深刻な氣持が輕く取扱はれてゐる。『遊ばせて食はす亭主に着せてやり』はよく讀むと亭主が女房を遊ばせて食はすのか女房が亭王にか八々古敷くなる、一考を要する。敏郎氏は遠く桑港に在る作家。桑港々々と想ひを遠く走せて見ると異常な懐しさが湧いてくる。第一に距離を考へる、大都市の一角を想ふ、熱心な作句振りを感じる、特に川柳の作家たるに於て吾人は非常に嬉しくなる、永しへに氏の精進を祈つて已まぬ。僕のみならず多數の川柳家がさう思つて居るに違ひない。敏郎氏へ母國の川柳家の心持を通じて置きたい『送金に飼はれる樣に生活す母』想は採るべきだが飼はれる樣にの感じ方が少し殺風景な感じである。『電鍵の不平局長佛なり』は前書がなくても一種の温かい面白みが油然と湧く句、も一度敏郎氏の健在を祈る。『愛慾に燃ゆる瞳ぞ避けがたな』閑生氏の句、無技巧の技巧とはこんなのを言ふのだらう。下五がよい。『メーデーを見に行きたいと出たつきり』僕だつたら中七を見に行つてくると、こやる。その先きの連想の少い句だが。どつちがよいかしら。『目覺むれば直ちに修羅の巷にて』その通りと云つて終へない眞面目さを買ふ。善治氏『仲仕の子やはり仲仕になると云ふ』は蛙の子はやつぱり蛙の子だといふ言葉に邪魔されて少し力弱く感じられて惜しい。それが無いにしても穩和しい句振りが損。『顔役の壁から箸が割れて行き』巧いつと叫ばせる句、上半が殊に巧い。實感の句がこれほどに消化されると可いのだがそこが六つ箇しいところか。『久々に來た友達へ子があまね』武子氏『一人寢に蚊帳の匂ひのせまるなり』同、二句共家庭的な感じはよく出てゐる。が一寸した力弱さが仄みゐる。客觀的な心持がさうさせるのではないか。『浴槽に大家の顔も浮いてゐる』吐句坊氏、よく舊師と出會つたり、現在の先生と出會ふ句を見受ける。もがよく利いてゐる。この句實感ならんことを祈る。『滿服の顔降りてくる段梯子』は丸萬とか何とか大衆的なすき燒屋の大きな段梯子を思はせる。滿服の顔がよかつた。松山の青帆氏。中々句の仕立方の巧い人らしい。『鳳仙花賞めて女が借る便所』なぞ情景を思はせるに相應しい。併しこれが過ぎると『お寺への近道行けば蛇に逢ひ』の樣に寺、近道、蛇、と餘り道具がつき過ぎる嫌いが生じる。餘りこの手法は弄しない方がよい。適宜にありたい。さう云へば神戸の志郎君もその傾向がないでもない。よく考への屆いた句が多い。『勸誘員材料になる悔みに來』は材料になるが巧いところだがその巧さが目につくところに臭味がありさうだ。『内緒金妻が脱がせる服で鳴り』も行屆いた叙法である。敦厚な

叙法などでもいふのであらう。實感味が濃いゝので中々面白味が深い、ほゝゑませる。『難波までふところ寒く見送られ』『湯たんぽはあたゝかいまゝ死んでゐる』共に豆秋氏の句。前句は大阪人の生活の一部を思はせる佳句。後句は讀んで胴震ひゞ感じる樣な句、恁っした變つた句は常に覘はぬこと。神戸嶺月君『ゆく〳〵は妹もまた人のもの』兄の、それも獨身の兄の心持が察しられる佳句ではあるが理智の閃きが見ゐる、『看護婦を笑はせて見る程になり』『氣ちがひのなにか言ひたい天を指し』前句は殊に平凡、後句は足りないものがある。前後共に熟が不足してゐる。松山雨眠氏。『女湯へ聞けよと節が改まり』は境地が古い。『蠣舩の便所へ供がついて來る』は興味が薄いが前句よりは良いと思ふ。大阪喜由氏、達者。句が活々としてゐる。但し『意地張りへ意見の通り荷が崩れ』こいつ一寸解り難い。何の荷か、車の上、風呂敷、そんなに積んだつて無駄だとでも云はれたのか、その荷が案の定崩れたといふのか、荷が崩れは或は專問的な熟語か。松山の玄々子氏、所謂、柳境的な句、よく判る句。大阪醉亭氏、實感味たっぷり よい傾向と思ふ、『呼び込んだ屑屋の顏のいびつなり』『頼まれた兒を抱いてゐる重い事』共に作家の心地よい句境を祝福する。『第二乙父母だけはよろこべり』姫島の觀月氏、何と幼い叙法に眞情を盛つたことよ、こゝから出發したい。石川の柳月坊氏『硝子戸にしてからあけぬくせがつき』些細なことにも人間味を發見するものだ。この句はこれでよい。議論は要るまい。

◆作家がどんな氣持で句を作つてゐるか。何を期待して句作してゐるか。それは句を通じて初めて觀るものに解る。句を見ずして解る筈がない。だから句を讀んでそれに溢れてゐるもの滲へ出てゐるものから味はねばならない。それを味はふには、受け入れる刹那には、白紙の心持で何一つ構へてかゝらないで率直に句そのものに自分をぶち當てることだ。その第一に享けた印象を自然に吟味し作家の心持にまで立入つてゆく。だから如何に作家が哲學的期待から句を作つたであらうともその句が持つ言葉から生む感じが充分でなかつた場合は讀む者がそれを感じない結果になる。それが評者の認識不足に據るかどうかを獨斷することは妄に許されない。若し評者が句をみる前からその句に或物を期待してかゝつた時にはその句は非常に佳いか非常に惡いかにならなければなるまい。それは本當に句を愛する見方ではないと思ふ。

◆『飲みなれて今日の肝油ちと多し』市公。作者にとつては必つと嬉しい句に違ひない。ぴつたりと氣持にはまつてゐるだらう。人には受けないかもしれぬが。氣取つた句より人に受けやうとした句より遙かに氣持がよろしい。『前身は語りとむない蝶々なり』無鬼。成程と思はせる句、人間にもこんなのがある

巧い譬喩だと思はせる句。『桃割れに棟上餅が飛び込んだ』不忘。大膽にして奇拔だ。村落の情緒が出てゐる。偶にこんな句も面白い。『お前には大金と母きつとなり』柳巷。川柳が小說にも負けないといふのはこんな句を云ふのだらう。慥に面白いところがある。『硝子越し春を見てゐるペンのタコ』盜鐘。よく情緒が味はへる。平和な境地。『ホネムーン嗚呼忠臣の墓の前』不然。ほゝゑまざるを得ない。圓熟した叙法だ。『聽衆をみんな無產にしてしまい』も輕快、近頃の風潮が頷ける。その中に無產でない人もゐたのだらう。『九州へ來てもお金が降らぬらし』光哉。この句を見ると一頁前にあつた金澤今雨氏の『さて來たが都に金も落ちてゐず』によく似てゐると思つた。同じ樣な場合らしい。さてこの次ぎにはお互に恁と云ふ句は作らぬこと。『返したがよいかと指輪氣がもめる』直情を表した句　叙法が變つてゐる。作者を見ると愛媛の愛子とある、婦人らしいのも興が多い。『湯に入ると手拭坊主作り居り』空山。近頃に見ぬ快い句だ。こゝこそ題詠臭のない句と思つた。この調子で行きたい。『彼の人が目にちらついて厚化粧』はもう同じ人の句でも臭味がある。併し面白い句ではある。『鉋使へば日給になる音がする』嘉月。日給になる、何と皮肉な言葉だらう。音がするが實によい。佳句、併しこんな言葉を褒めると誰れでもすぐこれ計り覘ふから困る『子を中に蒲團の柄の褪せて行き』二竹。一寸夫婦生活を考へさせる句。然して面白い。小說がある。女の氣持が出てくる樣に思ふ。佳句だ。近江のたけし氏、いゝ句を作る人だ。『恐ろしや算盤なんかはじくまい』僕等の近づけぬ心境を見せてゐる。但馬の丁坊氏『花の色はうつりにけりな子が五人』『なけきつゝ獨りぬるなり白髮染』和歌の文句とりは危いく。うまく行つてお慰み。後句は巫山戲すぎる。『子があればなごゝ玩具を見て通り』晃卓。安らかな境地、『犬の仔を門に遊ばしお張物』壽枝女。正に婦人らしい句振り、だから女の人にも川柳をうんと作つて貰ひたい。女でなくてはならぬ境地を見せて貰ひたい。優しい句だ。堺の太路氏『解禁がごうのかゝのと店は閑』樂に句を作る人らしい氣がする。大いに緊張した處を見せて欲しい。『上陸が分れとなりぬ旅の戀』桂枝。短篇物だ。氣が利いてゐる。『隣の子おあしをもてば客になり』可村。見方が理智的であるが句に忠實なあとが見ゐる。『沈めても子の輕石は浮き上り』同。句全體から靜かな暗示をうけ取ることが出來る。これも氣が利いてゐる『見るからに少年棋客こましやくれ』時雨郎。さう感じたのであらうが斯う云ふ場合、あまり直接では惡い感じがする。矢張り內容に飄逸味とか諧謔味とかを持たせたい。單なる惡口と取られないやうに。大阪一舟氏。老巧な詠みぶり。『見て貰ふのだとも知らずに叔母の供』男か女か兎に角見合ひに似たものへ

出かけることを云つたのだらう。少し陳いと云へるが馴れた調子だ。『厄といふのはこの事か妻子病み』句が落ついてゐる。『旅の風呂淺瀬を渡る氣味があり』川柳亭。面白い見つけごこだ輕い心持。『園服の一人になるときたな過ぎ』『衝突をしさうにボート行き違ひ』大阪の狂雨氏の句。觀察が面白い。途上雜觀といふところ。『東西屋火事にお客を奪はれて』折草。一寸笑はせるが笑つて居れない悲劇だ。『電報々々うちかしら起きる』石竹。石竹氏に似合はぬ平凡さだと思つた。これでは短く云つただけだと思ふ。『拍手してパイプの煙草さんでゐる』掬水。事實の報告みたいな句だが作者はこの句に苦心しただらうと私は察しる。『蜂の巣の悲哀雀の巣の歡喜』天絲。僕には僅かに對照の興味しか感じられない。もう一歩踏み込んで考へた時にいろ〳〵の連想を喚起して呉れる。それは可成面白いものであるが併しさうなると句としての價値が減ずる樣に思ふが如何。何しろ變つてゐる。

◆妄評多罪、言はれるまでもなく自分の句を振り返つて見た時述べるべき言葉もなくなつてしまう。それに本誌への投句も殆んどしないでゐて、盲評を恣にすることは本誌の讀者、投句者に對して禮を失してゐることと濟まなく思ふが御海容を願ふ僕の句は毎號『ふあうすと』に發表してゐる。（終）

トルストイと川柳

櫻井圓角

曩日トルストイの藝術論を讀みて我が川柳の藝術的地位に關して大に意を强うする所があり、茲に所感を錄し、先輩諸氏の御示教を仰ぐことゝする。

一、藝術表現上の理想とする所は簡潔、單純、誠實である是れやがて人間生活形式の骨子である。

と言ふて居る。之れをわが川柳に照すに

イ、簡潔なる點に於て單に十七字の簡短さ、世界廣しと雖も最

も簡潔なる文藝形式と云はねばならぬ。此の點滿點である。

ロ、單純さに於ては形式上十七字以内の短さは必然的に内容の單純を招く複雜なるものは屹度失敗に歸する。從つて川柳の内容は必ずシングルで、ピュウワならざるを得ない。

ハ、誠實は明瞭さを意味する感情を僞る事なく卒直に表現するを生命とするは川柳である。何等技巧はない。否技巧を弄する事は排斥される所である。

斯くてトルストイの藝術的理想を全的に具備する所のわが川柳は理想的文藝と言はねばならぬ。恐らくトルストイ日本にあらしめば、川柳を飯よりも好み川柳の光彩は世界的に偉大を加へたであらうと思ふ。

次に彼は藝術の目的に就て云つて居る。

二、藝術の目的が美を表現する事、即ち快感を得る事にありとするは恰かも食物の目的が美味即快感を得るにありと主張すると同樣間違ひである、吾人は言語に依つて意思思想を發表し相交感する如く藝術に依つて感情の發表をなし交感するものにして藝術は實に人生必須欠ぐ能はざるものにして、人と人を結び付ける主要なる一手段である。

と斷じて居る。故に川柳の人生に於ける價値は必要缺ぐべからざるものゝ一として藝術上即ち文藝上理想的のものであると云ふ事が出來る。小說・詩歌等の文藝に比して吾が川柳は藝術味に於て豐かであると云ふ結論に到達する。

次に彼は藝術の職能に就て曰く

三、藝術の職能は理論では理解し難く、親しみ難いものを理解させ、もし感動させもする所にある。藝術は或外的樣式で其感情を表現する時に始まる、そして其藝術によつて人々は互に同一感情に結付けられる。

觀者或は聽者が同一の感情に感染されさへすれば、それは藝術である。

藝術は人間を互に同一感情に結付けて人間同士の一致を計る手段である。從つて人類の幸福への進歩に必要欠ぐべからざるものである。

若し人々が、藝術により感染される能力を欠いで居たならば人類は今より野蠻で、分離的で敵視し合つて居るでせう。

といふ。川柳によつて互に感情の交感をなしつゝある川柳家達の親和的なるの事實は偶然ではなかつた。全く川柳の藝術味の然らしむる必然的のものである。吾々川柳家は幸福である。そして進歩的で、且親密に相扶け、益々共存共榮の極樂境を形造る筈である。

次に藝術の主題に關して論じて曰く

四、人類の人生觀は、より低級より、より遍狹より、より頑迷よりより普遍的に、より高く、より開放的な人生觀に絶えず進展する。

川柳の普遍性は實に其特長である。教養の有無に拘らずブルにしろ、プロにしろ　老ひも、若きも、將又性の如何を問はず、凡そ人こし名の付けるもの相交感させるはない。尚ほ此上の欲を云へば其主題を一致して洋の東西に拘らず互に交感するに至らば更に世界的に進展するであらう。殊に愉快に堪へざるの點は他の藝術品の如く富有階級に累せられざるの點にして個性の

露はなる表現はごの藝術にもまして力強き滿足感を覺ゆる。川柳が金で左右出來ない結果墮落はない。從つて所謂其模倣品を作る方法は發達して居ない。卽ち詩的振る事も要らない。細叙法は川柳の敵だし、性慾を取入れる事、方式を變へる事も効果を見せず、謎も排せられて居る等まことに現下の川柳は健全なものである。だから川柳界には川柳職人と云ふものゝ存在を許さない。未來の藝術家は藝術能力を持つた全民衆中に專門家としてゞなく散在するに至る。

B、未來藝術の表現は多くの努力、複雜した技巧を要しない。明瞭單純、簡潔が要求さる。健全な感情は人類自然で固有の生活を營んで居る時にのみ生ずる。從つて藝術を多額の報酬と代え藝術製作で生活の安全を保つ如きは最も有害な事である。

C、未來の藝術家は或種の勞働で生活を保ちながら、普通人の生活を送るであろう。

故に其藝術品が廣く行き亘る事を主要な喜びとして多額の代價と交換する爲製作するといふことは了解に苦しむであろう。

D、未來の藝術家は商賣人を驅逐するであらう。

E、未來の主題は萬人の自然生活による經驗を現代宗教知覺を通じて流露し誰にでも分る樣な感情を主題とするに至るべきである最も陳腐な、平凡な、ありふれた生活現象も、一度び宗教的見地からこれを見ると忽ち、最も新しい、意想外な感動的な情緒を喚起せしむる。

F朱來の藝術はお伽噺、小謠、子守歌、謎、笑話、スケッチを作る方が小說やシンフォニーを作るより重要になる。

トルストイの理想とし、將來斯くあるべしと爲す所のものは現下の川柳界に於ては既に〳〵具備して居る。進步的なる川柳よポプユラリチーなる川柳よ！吾が川柳界には川柳職人は居ない技巧無く明瞭、簡潔、單純である。普通人の生活を送る川柳家よ。多額の報酬を物せぬ川柳家よ、商賣人の存在の可能性なき川柳界　何と淸新な空氣の顏を撫でることよ！

コスモスの淡さわれにうなづける。

新譯詩と川柳

松盛琴人

近頃英佛伊其他各國の詩を新譯せる稿本を手にした。

「二行詩」　ヘリック作

女房もらへば燒もち惜氣　　不平苦情が持參金。

×

娘恥かし否やとは云へど　　

いやは應さの下心。

日本都々逸に似てゐる。然も内容に於て東西人情に變りのない處が面白い。川柳子は之等の境地を何う取扱つたかさ一寸古句を覗いて見る。

持參金嫁なけなしの鼻にかけ
持參金わつちや片はさむづかしい
胸倉を女房關口流にとり

なぞさ大變な事になつて來る。次の娘恥かしの方では。

よしなよと娘一寸ほどゆかみ
聞かぬふりするは娘の吉事なり
其嫌やさ下女羽子板で叩くまれ
口説かれて娘は猫にものを云ひ

限りがないからこの位に止めておく、川柳は十七字で百五六十年も以前に最うこれだけ簡潔に鮮明に境地を完全に表現しつくしてゐる。尚今日の新川柳に於てはこれ等の想は早や過去のものさへ云はれるほど發達してゐる。

かんしやくのやうな目をする色娘
忍べさは娘づぶさくなりはなり

此應になつては大變だがよくも穿つたもんださ感心させられる

同「ヘリツク」の短篇詩

酒のみて樂しく話せのめる間に
あしたはおそし今日にそ先きよ

×

お目にかゝつて知人になつて
戀したあさで振られた時は
あさの淋しさ身にしみる

聖書に明日は明日の事を思ひ煩へ、今日の苦勞は今日一日にて濟ますべし、さ云つた言葉がある。ほんさに何も取越苦勞するには當らぬ事だ、此酒を呑む詩は左うした人生の哲理を詠つたもので本誌八月號の卷頭を飾る路郎先生の句

みな呑んでるぞ、ビールが散るぞ、夏

の一句は正に斯ふした人生哲學の上に生れ出たもので、然も僅か十七字で燦然さして光輝を放つてゐる點でヘリックの短詩以上である。お目にかゝつての詩は失戀詩である。これも川柳では詠い古されて散々あるが川柳では時間の點でこそは長く表現し得ない。併し必適する樣な句は隨分ある。

三年の戀さはきつい日ましなり
引け前の初會ふられて來たのなり
知らぬ事知るほどせまくなつた戀

「壞れたパイプを詠める」Jリムソン作

見捨られて今は冷たい土の寢姿
ついぞまだ生きた息で温かだつたに
土で出來たすべての生物好い標本だ
誰だつてこれ以上の碑銘が持てやうか

境地は正に新興川柳の目さすものであらふ。内容は思索的で實に優れた詩ださ思ふ。斯ふした境地を川柳で咏つた者に故宮島

龍二君のものに見る

運命を食つてしまつた氣狂　龍二
晒されて〳〵死の庭白し　同
動け夜の西と東へ蟋の影　同
秋の蠅お前の足もやつれたれ　同
土溶けて水、水消えて虚無之身　同

だが間違はね樣に願ひたい。こればかりが新興川柳であるといふのではない。此外にも澤山の詩形はあるのであるから、これは私の狹い範圍で差當り參考書も持たず頭に浮ぶまゝをすぐべン先きへ云はせてるのであるから。大體を云ふと斯ふしたものは專門的に充分參考書の中に埋まつてやる仕事なんだが、忙がしい私はそんな事は出來ない。矢張り持合したもので間に合はせるより仕方がない。

「抒情詩」　W・アーリングアム作

池の面に四羽の鴨　水のかなたに草の岸　春のあを空飛ぶや白雲げに小さけれど　長き思ひ出　涙の思ひ出

川柳社會進出に伴ふ一面に於て句の向上は此内容に飛躍を試みるべきであらふ。

熄闘の錐の心ぞふかみゆく　鮎美
思出の遙か彼方に見ゆる山　琴人

「抒情詩」二

落日にかさなる雲や
ダイヤと光る宵の明星
うるはし碧の遠き山
戀は素服をまとひて

×

流すべき涙だになく
語るべき言葉さへなく
暮れはつる夏の一日
うれしき戀は絶へし

我が川柳は斯ふした時間は語られない、止むなく立體的に表現を試みる其處に句は尖鋭化す。それを其まゝ突進まんとしたものが新興川柳となつて現はれ、一方は之迄の川柳を充分研究した上で自然に向上進歩して行かふと云ふ漸進主義のものと、未だ既成の畑に埋もれて泥まみれになつて居るものとある。私達は川柳社會化をモットーとして居るが、勿論句の向上進化をも念としてゐる爲めに、自ら新川柳と稱へてゐる華々しくはあるまいが、實質堅固には歩んでゐるのである。川柳塔から抒情詩を二三擧げて此稿を擱筆する。

待ちあぐむ心で逢へば泣いてゐる　普門
看病の氣兼箸の音膳の音　冷々子
夫婦默りアルミニユームの唯白く　素人

老酒甕を抱いて（其二）

竹内多聞

津浦線

南京事件ですつかり燒かれた此の地での唯一つの日本人旅館寶來館を二泊でおさらばをして揚子江を愈々北に渡つて一路天津まで支那の里數で千四百二十里といふ、北岸下關の驛は素敵に大きい、又しても支那兵のトランクの檢査がある、モ少しで南京では上海から買つた麻雀を沒收されるところを遁れたが此處の驛ではあまり嚴重でない。

青龍刀や常磐御前の笠みたいなのを背負つて草鞋をはいてゐる支那兵、淺黄の軍服も大分ボロになつて馬鹿に革バンドでブラクルこゝの好きな國民だ、ピストルや飯盒や鞄やいろんな物を吊つてゐる。二等に乘つたものゝ人氣の惡い此頃の支那の內地しかも津浦線などは外國人は一人も通らないが一人々々の支那人の深切さ可愛いゝものだ。

淋しさに仰げば雲は泛いてゐる
旱雲驢馬の行手に高からず
大陸の明日を殘して沈む日よ
陽と共に沈み度し汽車の窓による
夜さなる支那に戀りはなかりけり

二晝夜の汽車は濟南で六時間位も放つてけぼりを食つた。自分の通つた五月十五日は二日前に日本駐屯軍がスッカリ撤兵してしまつた直後で邦人商店などはビクッイてゐた頃・ヤオラ河南の馮玉祥は蔣介石に戰ひをいどんだのもその頃既に十四日は唐生智の軍が津浦線に出動して何時列車を阻止するか判らぬ矢先であつた、その管僕等ののつてゐる列車で行違ひの車は貨車に自動車や大砲・馬、兵隊をごつちやに積み込んで蚌埠といふ

ところに行くらしい。

孔子さんの曲阜も泰山もすぎて二晝夜目の朝汽車のボーイが『チエーチン』といふから聞けばモー天津だ無事で津浦線を通過したことは先づ重重であつた。

天津外國租界

アカシヤに踵の高い靴の音

天津郊外の鳴鑿ちに行く目を瞑つてゐても一發放てば三羽位白い腹を見せて芦の水に浮く、あんまりこれすぎるのも面白くないので戻つた。

北平（北京）

支那は北平に來てやつと落付いた、道は東洋にも此の位整つた町はないとかいふが、街區截然吾が京都のやうに町家も又皆何れもざつな建方でないのは古來王城の地らしい。

北平は狐格子で槌の音

清朝の沒落は此處に見る壯麗な宮城の眺めを、北海公園の白塔のいたゞきから見下す紫禁城は今し名物の濛々たる黃塵の中に蜃氣樓はかくやと思ふばかり燦然と納まつてゐる。內城を見るに支那は何處に行つても金をこつてゐるしかもそれが一元（一圓）一元二角とか五角（五十錢）とかお安くない。往來を自動車で通れば通行稅として一元をせしめられる。

北平の此處にもぜにの要る名所

その辮紫禁城內武營殿太和殿中和殿の寶物の半數以上は僞物とすり代へてあるを後で聽いて癪た馮なごはいつか奉軍に寢返り打つて北京に這入つた折、大分持ち出して外債の擔保にしたなごゝいふてゐるが何うか、失望せざるを得ぬ。支那は何處でも目欲しいものは佛さんの首でも大分盜まれてゐる大同、雲崗あたりの石佛の顏は殆んど無いらしい、日本の京都邊の骨董屋には千圓位の値をつけて持つてゐるのも可成りあるらしく。自分の見た北京郊外玉泉山の裏山、離宮內の陶塔の佛像手のとゞくところはスツカリやられて大理石は荒れるにまかせて番人もゐない。面白いのは其れ等の名所の國寶を監視してゐる番人が金でいふ事をきくのだから、試みに北京天壇の龍の瓦を觀光客が盜るかと監視して後から來るおやじに案內の支那人が交涉すると態度一變自分が先になつて盜んでくれるのだから堪らぬ、あんまり大きなのは門番で見付かる、見付かつたとき亦つかませてやればニヤリと笑ふ。

門番は握つてからの愛憎なり

番人の藥がきいた素振りなり

支那は凡てコンミツションの國だ。何でも所用費用の三分の二はそこらに廻される十萬元を要した建築もその實工事實費は三

萬元位の仕事しか出來てゐない。困つた國である。

一路滿洲へ

汽車でモ一度天津に戻り汽船を利し滿洲に渡るとはからずも船中で天津の川柳家和田默然人氏と逢ふ同君は大連の句會に出席の道であつて日ぐれ大連で句會に出席してゞ佐々木三福氏の住所なぞを知らしてくれ非常に明るい人で船中一晝夜を愉快に語つた餘裕無くして大連同會に出席出來ず先方へは大分御迷惑をかけた此處は日本の統治權が行きとゞいてゐて支那とは思へぬ日本語が判る惡俥夫もゐない日本の錢が使へる、ヤレ〳〵と寛いだ。滿鐵は大きな仕事をしてゐるその筈十數億の借欵投資其他で日本の金を費つてゐるんだから、滿洲一帶は滿鐵王國であつて關東廳なぞのお役人は旅順に小さくなつてゐるやうに見へる、こんぞ拓務省なぞ來來たがいろんな意味で滿鐵も變るであらふ。大連は日本が建設した洋式市街である。

大積　連木細工の街大連に草疲れる
旅順　説明もない戰跡にしんみりす
　　水師營放つとけぼりに熟れる麥
滿洲　アカシヤの蔭晝めしの色になり
　　滿洲の山は崇りのやうに禿げ
　　滿洲にのんきな雲が遊んでゐ
　　朝からのまんま の雲で暮れて行く
　　鋤の馬日本の方へ歩き出し

奉天

奉天は張作霖の息がのこつて餘光今尚、學良は阿片で大分弱つてなさるらしいが城内に入れば支那人の偉い勢ひである、自動車にのつて四十錢といふから朝鮮銀行の一周札を出すと四十五圓程釣錢をくれた、あつけにとられてゐると奉天票の大暴落、電車賃一區のつても三圓五十錢位、俥夫に四十圓やつたら足らんちゆつて黄な齒を剝いてゐた。撫順も二日を割いて石炭の穴を見る地下三千尺の下で鶴嘴を握つて見ると亦別の感じがする。

朝鮮

一路安奉戰は新義州で稅關の檢査を受け時計を一時間卷いて支那と境のあの鴨綠江を南下し京城では日本商業通信の山本副社長の歡迎を受け殘り少い日をゴ苦勞さんにも金剛山に行く、内金剛、外・海と三つの奇勝は日本に金剛山があるといふ大きな誇りを感じた大いに宣傳したい、京城の景福宮を中心に朝鮮滿覽會が今秋催さる百萬人の人を入れる心算で工を急いでゐた。

金剛山藥水

山の怪に抱かれ石積むあたゝかに
山靈にめぐりて逢ひぬ石を積む
　　田中南嶺殺された萬相亭
血の壁に貼りたる鮮字新聞かな
オンドルの部屋を覗けば木の枕

一月あまりではあつたが老酒瓶を抱いて上海から支那大陸を北上滿鮮を經て今本土に戻るに朱碧の彩ごり支那大陸のカラーありとがめられたり破れかけたり厄介物は時には放棄せんと思ひしが持ち歸つたことが此の瓶をして價値づけてゐる。

壺抱いてゐるのに日本急はしない

近作柳樽

路郎選

スクラップ死後を思へば無駄なこと　鳥取　聽松
子も孫もあるに自炊をして暮し　同　同
作文に俺れの癖なぞ書いて居り　同　同
ひとり子で育だてた母に罪はなし　同　同
森永の菓子を子供に教へられ　同　同
耳遠き親父に困る客があり　同　同
マネキンの何んのと女得は得　東京　雨月
初戀の話をするに孫を抱き　同　同
虚僞の戀嬉しがらせて罪なこと　同　同
百圓を見せつけられて見たうなし　同　同
諦めてくれくれ母のうるそうて　同　同
螢狩り草履ぬらして歸るなり　大阪　狂雨
前借と知らぬ女房の笑つて居　同　同
先方のラヂオも聞こゆ電話口　同　同
眼藥へ子供キチンと座るなり　同　同

きかぬ氣の丁稚は遠く水を撒き　大阪　一柳
もう耳が耳がと隱居の御挨拶　同　同
腰かけに居るさと今の勤め先　同　同
行商のカマチへなれた荷を下し　同　同
ステップを戸毎ふむ子へ捗らず　桑港　敏郎
脊くらべの弟に負けて母へ文　同　同
スピーチの終りへホット親心　同　同

柳友半僕氏令息大學卒業

大學を出たへ出雲は組んで居る　同　同
打ち水へ二足三足ダンスする　松山　武子
芋の葉の露に裸の子がたかり　同　同
水泳の波にこゝから境なり　同　同
透きとほる袖に風持つ汽車の窓　同　同
此の痩せた腕へ來る蚊を憎んでみ　大阪　内匠守
第一の鑵切を探さねばならず　同　同
街路樹に片側倉庫ばかりなり　同　同
燒芋屋明日の試驗を知つてゐる　同　同
吊革に娘たしなみ振りを見せ　堺　平八
抱いて負ふて引いていらだつ母になり　同　同
胡爪もみ隣もそれであるらしい　同　同
明日死ぬとせば何事を言ひ置かん　同　同
友達は何もくれぬが見舞に來　金澤　今雨
儲け口やつぱり金が資本にて　同　同
失戀をしたとてあまり短氣すぎ　同　同

大阪へ來いく來いに母困り　同
先生の心にもなる父兄會　鞍山　草明
其の後は豐かな家に暗く住み　同　同
買つてやる母の心も知らずすね　同　同
人々のなぐて氣樂な顔ばかり　大阪　閑生
友の訃に生きてる友をまじく見　同　同
燒香順手をひかるゝ子抱かるゝ子　同　同
缺席の御膳を下げて舞ひこなり　大阪　助六
賴まれぬ竿を入れこくイヽ近所　同　同
氣安さは鑵のまんまの飴を出し　同　同
はつたいをくれて一晩泊られる　神戸　九葉
日歸りにこちらの雨を尋ねられ　同　同

快方に向ふ

此頃は往診料があほらしい　同　同
土產物父へは話ばかりなり　松山　雨眠
御土產のすし此通りベッチャンコ　同　同
留守と言へと云ふ聲がして御留守です　同　同
魂の冷たさを知る明渡し　函館　魚里
温泉の便り二度目に金の事　同　同
土用干し妻懷しい柄を出し　同　同
ねてる子を起すボートの戎橋　大阪　樂烏
子が病んで金魚の數がふへてゆき　同　同
番傘が橋で見てゐる四ッ手網　同　同
肚見せるつもりがいつか鬼になり　神戸　可村

踏切を越せば一若また聞こゑ　同
當分の別れをちよつと飲んでゆき　同
亡き父を恩に着てゐる人に逢ひ　同　晃
可愛いゝがそうは出來ない暮し向き　別府　卓
貧しさの中なる笑ひ聲もよし　同
賃縫ひの柄を褒められ淋しがり　同
怪我した子遊びの場所を縮められ　神戸　志郎
釣れぬ日は糸を切られた事にする　同
夏だから夏蒲團あるぢやなし　同
達者な子車の後を押したがり　神戸　嶺月
螢賣り一つ逃がした星の下　同
水やれば茄子こちをむくてか〳〵と　同
たんぽゝの種傘さして何處へ行く　大阪　石竹
布團の重み夢かわりゆく　同
二三年を縫ひ込んでおく親の慾　同
無駄使ひするじやないぞと行李締め　同　大阪　伊山
社長の子一人を社員もてあまし　同
雨垂れの落ちて笑つて仲の好き　同
金もつて老妓だん〳〵愚痴になり　神戸　柳川亭
大阪を窓の都にして歸り　同
計劃があつての世辭かくごく言ひ　同
差向ひお金の愚痴は女から　同　尼ヶ崎　虚白
嬶曳と見せず太丸あるいてる　同
割烹服またお乳かと上を解き　同　島根　雷相

祖母の死へ二百許りの金が出る　同
あるひは俺れも死ぬかも知れぬ　同

ある病友へ

たまに來る母だ笑ふてやれよ君　螢ヶ池藏六
喇叭手に僕なるんです吹いて見せ　同　同
盥まで染まりましたこ値を言はず　同　同
理窟はこも角お辭儀して置け　尼ヶ崎木三
妥協てふ字さへなくばこ淋しがり　同　同
お化粧の何處か物足りなく終り　小樽輕舟
育兒法妻こ意見を異にする　同　同
ウエトレス支那へ行こうかなこ思ひ　廣島露斗
さりながら水の流れに春を見る　同　同
これ以上まかりまへんこ荷を擔ぎ　大阪幸泉
踏切場死體を見る眼そむける眼　同　同

思ひ出（二句）

初戀のかなしくなりしハーモニカ　島根花情
叱られて出て沖を行く船を見る　同　同
戀人の足音かるう戻つて來　大阪ひかる
我々を荷物にするもエレベータ　同　同
午前二時チップ忘れて歸られる　大阪豆秋
うまいものステッキガールに教へられ　同　同
明かし得ぬ事の素振も見て呉れず　松山文芳
白足袋を穿かねばならぬ代理なり　同　同
斷髪の襟一層に哀れなり　大阪狂水

賽錢を投げて女の氣も輕く　同
幕なしを車輪に見せて儲からず　松山　大鵞
赤ん坊に化粧するのも若い母　同
菓子箱が頼りになるこ思ひしに　島根　專路
夕涼み水田へ街の灯がゆらぎ　同
癒したいばかりに醫者におぢぎする　明石　啞聲
病人は俺れだけじやない待合所　同
やつこ歩く子へ母親の遠うすぎて　寶積　波路
笑つた時から戀になつた十八九　同
手本にはならない字だが額にされ　甲府　素有子
月兒草涼しき風があり餘り　同
膳に蚊が落ちて線香ちこ離し　長野　柳兒
深呼吸今朝も新聞そこで受け　同
そのまゝで置けない父の二十八　函館　竹二
猿廻しめつきり痩せた肩へ猿　同
行水へ取次ぐ電話腹が立ち　松山　松葉
瓦屋の叩き叩いて紋をつけ　同
逃れ來て螢は街の灯に迷ひ　大阪　しかぢ
砂を嚙む木履へ怒こけてゆく　同
歳をきかれるのがつらい女房もち　神戸　迷亭
ビルデング夜勤の窓に雨がふる　同
剪る程に花ひよろ長く活けられる　堺　太路
川せばみ怒つた樣な水になり　同
街路樹のめつきり夏になり切つて　神戸　郊村

保護願窓の涼たい風が來る　同　同
割前は出すが失敬すると云ふ　松山　玄々子
乳房もう黑ずんで來てお湯を替へ　同　同
履歴書を何枚書けば足るだらう　大阪　光哉
ラッシュアワー俺れも一人の數に入り　同　同
戻すのに詩集の手垢氣にかゝり　金澤　木偶人
打水殘りを金魚鉢へ足し　同　同
石炭塲ショベル食ひ込む音がする　大阪　卯五
九度五分の子のうわ言が淋しくて　同　同
氣樂さはラヂオの唄で一つ舞ひ　同　菊路
當然のやうに帶だの着物だの　同　同
朝戸を開けりや負擔が迫る　神戸　卯生
あほらしい客を自動車郊外へ　同　同
寢そびれてふと眼覺しのネヂを卷き　大阪　與詩夫
打ちつゞく不幸へ琴は立てたまゝ　同　同
伴れ子もう先妻の子に負けてゐず　同　さだを
一ぴきの螢へ梯子借りに來る　同　同
月を見るデッキと知らず見張りゐる　同　山茶花
儲け口近所へすまぬ音で更け　同　同
看護婦へうつゝのまゝで手をゆだね　堺　清路
鯉釣の今日一匹でくたぶれる　同　同
一杯のコーヒにも戀の灯がともれ　石川　柳月坊
嫌ですと言ふて女給は矢張りそば　同　同
導火線つけし自分はほつとかれ　大阪　憲太

水無月の茗荷葉蘭を小さく見せ　同　凡句郎
水張つて見せて輪替屋仕舞ひなり　同　同
マネキンは責任のない眼を使ひ　同　白柳
もう妹魔の手が延びる年になり　同　同
川風が裙を走つた夕涼み　島根　キヨシ
さて不安悧巧な者は皆頓死　同　同
村雨に逢ふたか列車濡れて來て　大阪　柳影
思ひ出の芝生只只青くして　同　同
人よりも危かつたを誇るなり　姫島　觀月
まだ紙幣のまゝの財布のたのしくて　同　同
憧れの身を人力にのせて行く　大阪　明果
マネキンのハンドバックも輕過ぎて　同　同
御親閲煙る大阪たのもしく　大和　勝二
踏切で待たせた汽車に乘りおくれ　回　同
近所へも鰯の賣れた聲がきけ　大阪　壽枝女
梅干してありその匂ひ陽の匂ひ　同　同

天神祭

お渡りに兒はくたびれて寢てしまい　鳥取　源太夫
男湯に玩具一つがわすれられ　同　同
言ふだけを言ふて親方居眠れり　螢ヶ池　波紋
來い〳〵の如來へ矢ッ張り逃げてゐる　同　同
先拂ひするも病氣の弱身なり　東京　石涯子
後押の子へ先生の目が強し　鳥取　湖山
共稼ぎ之だけ貯金するときめ

口惜しさをかむ搔卷の襟熱し　吳　仙人掌
默想の顔の小皺が淋しさう　大阪　一騎
ゴム靴へ今日一日の埃り見せ　神戸　不然
明け放つ朝から今日も暑さうだ　兼二浦　花夢
意の加くなつて一本吸ひつける　大阪　鶴峯
長病ひ螢逃がしてやれと言ふ　高知　蝸牛
二人ともむしがよ過ぎて死んでゆき　京都　繁坊
氣樂にも客を待たして王手飛車　堺　幻草
ちしやの葉の伸びる程づゝ摘み切られ　愛媛　愛子
夏となり女女で生きてゐる　同　空山
新聞へ凉味の寫眞初夏がくる　大阪　瓢柳
停車場へ目刺の土產追つて行き　別府　流舟

牛鬪

逃ぐる牛稍々小さくぞ見ゆるなり　伊豫　九天
遊蕩費妻子をかけて云ひ　大阪　喜由
琴の音に忍返しの嚴しく　大阪　天絲
惠まれもせず髮伸びてゆくばかり　同　喜樂
失策はみんな小僧が背負はされ　鳥取　佳水
井戸がへに昨年のまゝのラムネが出　松山　夢鄕
初めての月給袋抱いていに　同　青帆
三角の穴で西瓜の値がきまり　大阪　桂枝
打水に父の元氣と子の元氣　同　悟空
不孝者無心に妻の下駄で來る　同　酉一路
その次の言葉へ賴る善後策　東京　山門

大体の長さ圖れる指で有り　豐橋　芙蓉
鉛筆を耳にはさんで釘を買ひ　不明　青果
洗濯の胸をはだけた妻であり　兵庫　白水生
日給取十姉の樣な暮しなり　京都　折草
汽車の窓炭燒小屋が燃えてゐる　大阪　四五磨
誘惑に勝つた話を母にする　同　公二
此娘だけ人にやらぬつもりなり　同　炭車
久し振りもう寝ようかと午前二時　尼崎　秀正春聲
宴會の相談下戸へ纏らず　同　好次
タ顔や君の金歯の光ること　金澤　大樓
ゴム靴へ目高を入れて歸つて來　松山　柳幸子
不景氣に供米袋の大き過ぎ　金澤　ゆづらん
ネクタイを落し一汽車遲らせる　丸龜　一騎
緣先に居眠る猫のうらやまし　大阪　巳代松
男生の前はバラソル楯に拔け　同　三子平
赤裸々に言うて使は笑はれる　同　計加

母眼を病みて

ふと起きて肩をもむ手を又續け　大阪　嘉月
名議長なみたいていの世話でない　同　麥角
旅行から歸り帽子へ夏を知り　同　勇宗
服從の二字でごうにか生きて居る　京都　風來子
愛の巢の裏に桃の芽密柑の芽　大阪　雅幽
ビルディング矢鱈に避雷針を立て　同　吐句坊
ほんぼんと言はれ段々弱くなり　同　秋刀魚
景品の附く日を待つた樣に乘り　兵庫　鬼逸樓
憧れて來て大阪の端に住み　大阪　沒食子
はつきりと看護婦夜の雨をきゝ　武庫川　四方路
自轉車で挨拶をして走り去る　松山　計加

京参り　金儲けたら〳〵〳〵

襲名の兄らしうない名ゝはなり
俺の戀誤解したまゝ母は死に
父の文ちゝ讀みにくい文字多し
挨拶の樣に貰へゝ云ふてくれ
のんびりゝ畑でくらす日もあるさ
丁寧に云ふた心算が國訛り
爪びきで客を待つてる宵の口
下宿屋は優等者へも同じ膳
猫の蚤取つてゐる間に午になり
おちぶれてビールのつめも金に見ゐ
次の子の飲む乳を見て淋しがり
温泉の宿の二階で螢一つ取り
よく光る螢を見ずに寢てしまひ
差當り破れ團扇も用に立ち
瀬に遊ぶ子供の背の光るこゝ
此人ゝきめてもてなし違ふなり
家出してみたが故郷はよい所
これまでの戀を遊戯ゝ思ふ夜
カントよハイネよ等ゝ看護婦らしい口
納得させて肉体を避く
記念樹も伸びて學校は廣うなり
物質の不足へ妻は氣の狹く
夏になり下女の氣分は唄になり
皆妙藥を知つてゐる
見舞客
そこ迄が樂しい戀であるものを
讀みあきた本を枕に煙の輪
新綠をパラソル赤く縫うて行き
藥用紙しかめた顔でほかされる

大分　蚊郎
兵庫　無鬼
大阪　沐天
同　英夫
福岡　賀
大阪　ト居々
別府　豐泉
大阪　鐘羽
中關　一亭
大阪　醉
奈良　蛇馬
兵庫　香仙
同　湖山
鳥取　耕民
大阪　鯉友
尼ヶ崎　健坊
大阪　十里九
京都　潮浪多
螢ヶ池　運坊
同　湖舟
福岡　不忘
大阪　柳

同　神戸　黑子
神戸　雨天滴
大阪　一舟
兵庫　白水生
神戸　柳村
螢ヶ池　妙哉
同　詩華流

飛燕往來

松村敏郎氏（桑港）＝路郎宛

數ならぬ初心者のために、貴重な紙面を御割き下され難有候。御示導を願つた事柳友の人々へ報告致し候。六月號に日本ペイント會社の西村氏（松雨氏の從弟）に面會云々は、もと桑港に居た西村吉次郎氏に候はずや。風のたよりに西野田とかに書籍店にて成功、一名アチラハンとか。萬一同人でしたら洗濯屋の一番弟の惡筆屋がよろしくと御傳言願上候。尙御尋れするにはあまりに御手數故、差控へ候へども七月號五十一頁上段五行「落選のピラなしがらき屋は包み」商賣名でしたら一寸關東者には解りかれ候。家號に候はゞ格別に候も早々　七月二十一日　敏郎

橋本二柳子氏（片山津にて）＝路郎宛

先生、廿九日の夜行で郷里へ子供だけを連れて來ましたが、どこへ來ても暑いのは變りがありません。本年は白山か、立山へ行きたいと思つて居ましたが、一週間の休暇で來てるのと、洲本吟行が氣になるので止めて、片山津溫泉へ行くことにして　途中加賀笠間で下車、双葉吟社の宮村柳月坊氏を訪問し、一時間ばかり話して別れましたが、なか〳〵快活な十九才の青年です。夜九時過動橋で下車して片山津へ來て、廣い庭に面した座敷に寢轉んでゐますが、汽車から降りるとすぐプラット及び溫泉行の電車、宿、女中に至るまで感じの惡いものばかりです。今夜小松支部を訪れて他の宿か、山中溫泉に變らうと思つてゐます。三日に歸阪します。

橋本二柳子氏（山中より）＝

片山津の暑さに弱りました。昨夜小松支部へお訪れ致し、當夜白山亭に歡迎句會を催し下され、十數名の來會者がありました。夜九時五五分の列車で山中へ來ました。山中の方は餘程涼しく蚊帳を吹上げられる　程ですから他から見れば涼しい分ですね。中飯後金澤の方へ行つて眼隱子氏を訪問致す都合です。山中よしのや　橋本二柳子

高橋かほる氏（大阪）＝二南宛

二南樣十日の句會は首尾が惡うて　行けませぬあしからず。主から首尾して逢ひに來てくんなまし芝居事やら　川柳して暑さを他所にチョン暮らさうわいな……　十一日の日曜がおさしつかへがありましたら十八日に　お待ちしてゐます。

川村花菱氏（東京）＝路郎宛

芝關から來る丑の日の出前持　暑中御見舞申上候。花菱

西本三笑氏（石川縣宇奈月溫泉）路郎宛

あまりにも大なる自然に陶醉　して句も出ません。新鐘釣の浴漕は天然の岩で男女混浴夜分は涼しくてビールは呑めません。矢張道頓堀のシグナル程の灯が戀し。

長野晴濵氏（大阪）＝路郎宛

度々私の病氣につき　お訪れいただきまして誠に有り難うございます。一昨夜頂だい致しました貴著「川柳漫談」早速通讀いたしました。この間中から、臥床にありながら「經驗批判論と唯物論」といふやうな類の、かたいものばかりを讀んで來ました後なので、殊に恢復期の心身を、貴著によつて慰められたやうに思ひました。重れてお禮申述べます。今回の御著中のどの篇も、どの項も、全く普段のあなたのお談を、活々とうかがふやうな氣がしました　尤も、言葉の活々しさと、文字の活々しさとは、自ら種類が違ひますが、「漫談」の中の「盲人ゝ徵章」「庄下の佛像」「無口」「鼻の修業」「幽靈の靴」などは殊に面白く讀みました。また「君も僕も死ぬ話」では私の「われもまたやがて死ぬべし君もまたやがて死ぬべし覺悟したまへ」や、「會葬者八九人もや送るらむ大阪にしてわが死にたらば」を、「私の墓」では、私の「皆樣にお願ひ申せよきやうに斯く遺言すわれに財なし」をその他ちよい〳〵思ひ合される事がありました。「川柳染ちがひ」「一ト昔前の大阪見物」この二つも面白く讀まれました。後者などは、併し、中々苦心のものであつたらう　と思はされました。たしかにこの邊はあなたの獨壇場でせうこの病中に、私はまた有島武郎の、今度の全集中の「戲曲」を讀みかへしてみましたが、有島のものを讀むと、（外の事は今しばらく措く）どうも重苦しいやうな氣持になるのです然ういつた氣持と丁度反對の氣持を、貴著か

らは感じました。一寸感じただけの事を申上げました。(以下略)八月十五日

龜井花童子氏（函館）＝路郎宛

拝啓　御變もなくて結構です、度々御通信に接して恐縮してゐます。六月中旬頃より末つ子が悪かつたので皆様へ無沙汰をしてゐる始末です、昨日は川柳漫談壹部御惠送下すつて有難う存じます、函館の一文嬉しく拝見致しました。去る十日に柳友十名と青森へ飛脚同様の急しさで滞在十二時間と云ふ記録で行つて來ました。それは今度不渓人君と私とで海峽親善川柳會を起し年に二回交互の地で句會を開き兩地間の柳會の親交を厚ふする意味に於てです、その第一回を青森で開く事になつたので三休君を始め同勢十一名で押しかけ三太郎君も見えて居ました。出席者は全部で五十名結果良好で花輪を頂いて歸りました。昨年大兄さ札幌へ行つてから始めての旅です。それ程忙しい身体に成り御蔭で私自身は非常に達者に成りました(以下略)

八月十八日

長崎柳秀氏（ベルリン）＝路郎　豊乃宛

御芳書(七月十日御認めの分)及結構なる御内祝御惠贈被下難有御芳志あつく御禮申上候時分柄愈御清祥の段奉賀候　七月中旬頃は當地方も未曾有の暑さにてライン旅行に一層苦しみ「ケルン」より「フライブルク」及びスキツル國バーゼル邊では一入はげしく拾日間程は夜中窓あけつ放して眠り候も「ミュンヘン」(七月二十五日)の強き夕立以來俄に氣温下り十月頃の冷しさにかへり一息つき申候不肖幸に無事八月一日再びベルリンへ立ち戻り休養いたし居り候　八月四日　ベルリンにて　長崎柳秀

(以下繪葉書面)露支國交の關係上内地よりの通信手に入らず候へども當國日本大使館の通知では歸朝者は滿鐵線によらず北廻りしウラヂオを經て日本へ安全に着いたし候ゆへ聽ては内地よりの通信に接し候はんと樂しみ申居候

酒井駒人氏（相州平塚）＝路郎宛

拝啓　其後は御無沙汰いたしました。別にお變りもありませんか。小生方一同無事なれば御安心下さい。子供も近頃すつかりよくなり非常な元氣です。毎日海岸へ連れて行くので見違へる程顔など黒くなりました。今朝から大分涼しくすつかり秋らしくなりました。前の氷屋では娘が退屈なのでせう。時々子供を抱きに來て呉れます。句を作らうとしますが、暑かつたのですつかりなまけてしまいました。これからうんと作ります。例會もと思つて居るのですが、なにしろ平塚人は珍らしき事のみに走つてすぐにあきてしまいますので、どうにもなりません。それでも俳句は盛んです。柳路　千代二兩兄はとうく今夏は來ませんでした。又便りもありません。無事だと思つて居ます。これから店も忙しくなります。來月になつたら又四五人で近在へ吟行でもしたいと思つてゐます。裏の無花果がやつと食べられるやうになりました。其頃になるときつと先生の句を思ひだすのです又來年も一生を通じて。

ペンの走るにまかせてこんなつまらない事を書いてしまいましたどうか奥様によろしく申上げて下さい。近況お知らせまで　早々

八月二十三日　駒人

殘暑御見舞申上ます

厩生路郎

川柳漫畫の會

古今の名句を漫畫化して瀟洒な畫幅として頒つ（御希望の句に依るも可）

筆者　清水對岳坊先生
宮尾しげを先生
（希望筆者指定）

畫の大きさ　タテ四尺五寸　ヨコ約八寸

會費　一口金八圓五十錢

送金は爲替又は代金引換便

東京市外長崎町二四三八

申込所　**東京漫畫堂**

責任者　山路　信

一路集

（募集句）

大島濤明選

倉

成金と蔑すむ眼にも倉の壁　柳陽
差押へ見掛けによらぬ倉なりし　不然
倉庫町ひそり更けて火の廻り　竹二
午後の陽も束の間倉庫そびへて　柳兒
棚卸し丁稚せはしく倉に居る　新水
倉庫からぞや〳〵と出て正午に　天絲
人の手に渡つた倉もなつかしく　幼草
倉建てゝ近所隣りにうこまれる　芙蓉
倉さらへ何でも安い樣に見ね　市公
倉庫番巡査であつた事もあり　吐句坊
あの倉が叔父の息子の嫁のうち　蚊郎
改革に眞先倉が處分され　菊路
倉があり金があり旦那肥へゐる　秋刀魚
わんぱくもお灸と倉は苦手なり　八歩
燒跡へ土藏の威權見せてゐる　勇宗
倉の戸へ責任のある錠をかけ　嘉月
母屋から倉まで恐い灯を通し　木偶人
小作人地主の倉へ疲せてゐる　六郎
留置場の樣にも見ねる倉の窓　折草
出戻りへ冷淡である倉の壁　たけし
投げ付るボールがはづれ倉の壁　麥角
明石にて
夕燒に淡路の倉の光るなり　凡句郎
夕方の藏が小僧へたゞ怖い　四方路
薄暗い倉でニュースを見る小僧　四五磨
空氣銃チト高過ぎる倉の屋根　一舟
失業へ倉の白さが目立つなり　雷相
脊の子が倉を持つてる宵戎　正春
川筋の暗さへ續く倉庫街　鬼詩夫
虫干を倉からたんと運ばされ　夕鐘
死に絶ねた倉へ榎かをいしげり　敏郎
倉の壁に竹を寫して風があり　勝二
倉からの樽重かつた汗を出し　雪峰
頂上はやつぱり倉を立てた頃　雨町
酒倉の蔭に低い裏長屋　虚白
倉仲仕畫の休みの力業　花蝶

川柳類題索引 (8)

川柳雜誌自第一號至第五十九號

安井ひろし　越村加香　安井欣女　共編

題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は川柳雜誌の號數、算用數字は其號の何頁を表はす。

(十)鳥獸、虫、魚、草、木(2)

K

小猫 八19
蛙 龜 一九11
蟹 一九10 二九20 四〇46 五五53
金魚 二三23 三〇7 三〇33 五五54 四三56 五五55 57
蚊 小 五六45
毛虫 四三53 鳥 四五49
カナリヤ 五〇56 黑猫 五二54
蜘蛛 五七54 コスモス 四八68
柿 三四32 三六61 四七50

M

虫 三四13 四六51 五七47 53
松 一二29 五〇53
松茸 五八46 五九48

N

雞 三13 二五23 五三53 五五59
蚤 七14 四二44

四つ辻倉まで見せていゝ葬し　明果

二　點　句

倉住みに押され熟柿の落ちる音　笑童
垣一つ隔てゝ倉が立つてゐる　花夢
倉の窓開けると岩戸程明り　文芳
良い髭と恩給を持つ倉庫番　桂枝
倉に錠下ろすが養子の仕事なり　悟空
倉へ來て母の手蹟の封を切り　萬樂
金倉があつて家中みな弱し　瓢柳
煙草盆一つに倉の皆動き　狂雨
重代の倉へ土足の執達吏　沐天
裕福な倉樟腦が減る計り　光路
我影の不氣味になつて倉を出る　山茶花
花提灯が出てから土藏元の暗　清路
倉の隅何か出そうな暗さなり　失名
番頭の内職もあり倉の中　沒食子
お先祖からの倉の落書　内匠守
倉の窓隣の秘密ふと見付け　鯉友

三　點　句

倉のある緣談に娘のあほらしく　輕舟
肯かぬ倉都市計劃へ尻を向け　光路
夜の倉曲者めいた影で來る　町二
祝ひ事お百度程に倉へ用　嘉月
せつかんの手で繼母は倉を開け　笑童
佛心の一つ手前へ倉を立て　柳陽
調節の米が欠伸をしてる倉　突支坊

蜂

初咲の朝顔蜂はもう見つけ　柳村
氣まぐれの蜜蜂生けた花へ來る　湖山
仲人のやうに蜜蜂花を飛び　吐句坊
蜂の巣の手入獅子舞かと見ゐる　空山
蜂の針顔半分を別にする　狂水
よく肥にたなぞと刺されてから　青果
蜂の巣へ鎌を大きく振り廻し　狂雨
蜂の子を子供らみんな喰ちまひ　玄々子
蜂に螫された子素直に母と居る　竹二
畑打を止める大きな蜂がくる　文芳
雨らしい蜂の出入の忙しさ　幻草
蜂針を持つた憎さを殺される　今雨
花畑俺より先に蜂がゐる　八歩

松丘町二選

蜂飛んで本堂の庭廣く住み　明果
憂鬱が蜂の行方を眺めてる　新水
飛込んだ蜂に恥かしさを忘れ　木偶人
死んでゐる蜂のお尻を押てみる　輕舟
人間を警戒せよと蜂唸る　圓角
花鋏蜂の唸りに迷つてる　柳兒
暴君のやうに花壇へ蜂が來る　藏六
人の子の總動員に蜂慌て　里魚
賣家と云ふのへ蜂の巣が下り　義彦
蜂の巣へ餘つ程遠く石を投げ　喜由
女學生ひとりは蜂へ膽を見せ　誠天
蜂の巣と並び大きなヘチマなり　つばさ
蜂の巣に近く杏が熟れてゐる　與詩夫

四四

猫　一一14　四十47　四九54　五一52　五七53　五八44　五九47　五八41　五八50
鼠　S　二七35　二4　五九44　五七51　蟬　一16　二七12　芒　五九49
雀　鶴　櫻　水　仙　T　二四14　四19　四八71　虎　九20　一七16
鳥　燕　U　一〇11　三一26　五二54　牛　鶯　三六62　馬　五三30　三7　三七14　柳　五〇52
梅　籔　二二21

（十一）娯樂、演藝、映畫　音樂、運動

A　遊ぶ　四三55
B　バイオリン　二二11　萬歲　四六47　琵琶　三一40　盆踊　三二22　四四59　五六43　ボート　三二34　四五59　伴奏　五六42
D　童謠　四〇33　ダンス　五〇57

蜂の巣をつゝいた報笑はれる　花夢
蜂を見たばかり刺されたに泣き　雨月
普請場を蜂が騒がす日の永さ　菊路
熊蜂へ笊も胡瓜もほうり出し　同
初から蜂は刺す氣でないのなり　光路
手に巻いた洗濯物で蜂を追ひ　同

○

蜂の羽音に思索奪はれて　柳陽
花畑蜂が氣になる二人なり　運坊
はかなさを雄蜂の骸掃きよせる　輕舟
蕣替へに弱りきつたる蜂がゐる　青果
斥候の歸へるこころを蜂がさし　無鬼
蜂にでも刺されたやうに女言ひ　たけし

仕返しに父さんを連れ蜂へくる　喜由
本當に蜂が怒つて巣を見つけ　雨月
蜂の眼に困つた竿が伸びてくる　一柳
牽制をするか頻りに蜂は飛び　同
蜂の巣へ案内役は腫れてる子　敏郎
年齢の差は雌蜂のやうに振舞れ　同

○

番兵は蜂の唸りに眼を据ゑて　新水
用舎驛待合室の蜂を追ひ　波紋
蜂の巣を和尚大事にして眺め　花夢
魚釣のぢつとおびゑて蜂に居る　柳兒
刺しにきた蜂でないのに殺される　皎月

耳隠し

双葉子選

○

みゝかくし先夫へ金をゆすりに來　町二
工場から汚れて歸へる耳かくし　柳影
本人は似合ふつもりのみゝかくし　今雨
みゝかくしこん所の露路を出る　同
みゝかくし餘程上へ帶をゞめ　キン三
みゝかくし嫌がる姉が好く似合　同
みゝかくし輕蔑をする眼に出合　秋刀魚
みゝかくしたくましげな洋傘も　鬼逸樓
みゝかくし結て女中は訪ねて來　凡花朗
みゝくしソヤソヤ連に眼も呉れず　三子本
噂から丸髷になるみゝかくし　たかし
みゝかくし性解放の事も云ひ　皎月
耳かくし結ふてる妻のまだ若く　柳幸子

石川双葉子
伊藤緑之助　共選

浮草の氣で暮してるみゝかくし　大樓
姑が結ふてやつてるみゝかくし　愛子
みゝかくしこのごろ母の氣にさも　佩琅
姉さんの個性を見せたみゝかくし　正春
みゝかくし工場へ通ふ兄をもち　虫詩史
みゝかくし大きな犬を連てゐる　内匠守
お願ひが屈き今日からみゝかくし　雪峰
みゝかくし決心ついた髷で嫁き　明果
みゝかくし隠しきれない疵もある　白鶴
合ふごとによく氣の變るみゝかくし　一柳
みゝかくしお題目に氣が合はず　狂水
みゝかくし差込む樣に受話器で　空山
みゝかくし行進曲の夜に疲れ　市公
こて具合ほめ合つてゐるみゝかくし　同

E
遠足　四19　二三23
F
封切　二二11
G
義太夫樂隊　七15　三五32　藝　五五57　四七43
H
花道　一四20　四三51
I
椅子席　四七47
J
ジャズバンド　五九52
K
歌劇　一一12　競馬　四一42
子守歌　四六51
N
縄飛　四一42　浪花節　四九57
O
踊女形　六13　五七51　四一45　五九46
P
ピンポン　三二34
S
三味線　二23　五〇33　一九20　四九54
スポーツ　一一7　一四26　五七48
双六　三〇13　三四9　二二19　三八36　四九52

美しい叔母さんと云ふみゝかくし　玄々子
お裁縫の一番下手なみゝかくし　太路
みゝかくし無暗矢鱈に手をたゝきさだを
みゝかくしハンドバックをねだつて　同
みゝかくし良人の嫌な狆を抱き　竹二
みゝかくし村では不良性にされ　柳兒
みゝかくし　鏡に長い尻をもち　悟空
女優型なぞと眞似てる耳かくし　湖山
みゝかくし矢鱈とたらに毛を仕舞ひ　雨月
初店の常座ははやるみゝかくし　新水
失戀からみゝかくし止めにする　喜由
數學の答が合はぬみゝかくし　春角
みゝかくし人形の樣に子を愛し　同
みゝかくし五月柳と取り合はず　たけし
桃割へそつと眼をやるみゝかくし　凡句郎
長屋から出たとは見ぬみゝかくし　晃郎
みゝかくしペン字が上手そうに見ぬ　沒食子
つり皮へ誰れより太いみゝかくし　雷相
みゝかくしお化粧だけの日を送り　黑天子
みゝかくし拂戻しを嫌ふなり　波紋
みゝかくし田舍の母は見違へる　白柳
世帶こは別な女房のみゝかくし　風來子
みゝかくし今日も嬉しい日がつづき　光花
みゝかくし遲く長屋の辻をおれ　勇宗
みゝかくしこかく姑と否み合ひ　山茶花
みゝかくし眉墨長う〳〵伸び　同
お二階はオールバックとみゝかくし　同
卒業に近いある日のみゝかくし　同
みゝかくしピアノの他に三味もひけ　嘉月
みゝかくしいけすな顔に好く似合ひ　清路
みゝかくしヘンな東京辯使ひ　突支坊
髮だけを無意味にまねたみゝかくし　花蝶
みゝかくし辻占賣を拂ひのけ　卯三
三十は越してるだらうみゝかくし　聽松
みゝかくしこころ殘りの人でなし　光路
みゝかくしいつか獨身主義もすて　菊路
みゝかくし白粉やけの首なりし　不然
(人)初戀と云へばいひ得るみゝかくし　卯三
(人)みゝかくし三人生んだ見わず　天綠
(地)みゝかくし乳に泣く兒をもてゝ　湖山
(地)髮だけを無意味にまねたみゝかくし　柳兒
(天)みゝかくし變るお客に草履れる　たけし

○　綠之助選

耳隱し後で弟見てるなり　柳影
耳隱し一人の親をよく泣かせ　町二
耳隱し結ばせて母もうれしさう　嘉月
生花も上手女房の耳隱し　清路
耳隱しこの頃母の氣にそむき　佩琅
長屋から出たとも見ぬ耳隱し　晃郎
事務服がよく寫つてる耳隱し　沒食子
耳隱し母氣に入らぬ顔である　今雨
すましてる白痴娘の耳隱し　衣童子
耳隱し日傘が似合ひ不良じみ　四方路
耳隱し今日は支那服着て出かけ　一舟
婦女界の通りに出來ぬ耳隱し　虛白
耳隱し噂の通り面長く　明果
耳隱し隱し切れない疵もある　白鶴

水泳　四三48
涼み船　四四52
芝居　四八12
サーカス　四九58
角力　五九45

T

太鼓　七15
玉突　一〇14
釣船　四〇34
葬ひ　四一45
釣　四五56

U

運動　一三14
唄　四一43

Y

野球　二三23
餘興　五〇52

（十二）通信、交通

C

近道　一〇13

D

電報　二20
電話帳　四二49
電話　四七49
電車　五〇55

E

圓タク　三五33
驛繪葉書　三六24
驛　四七49
五八47

五五53
花　五五56
尺　五五56

初日形船　五四51

五七53
四五50
八　五五56

家形船　五四51

五八50
五〇56
五一55

五九52
前　五二56

嘲けりの目とは知らない耳隠し　湖山
耳隠し村一番の小町なり　佳水
耳隠し上からずつたやうに出來　天糸
藪入りに下女美粧院の耳隠し　圓角
貧弱な亭主で目立つ耳隠し　白柳
耳隠しに結へば娘さん可愛いね　キヨシ
耳隠し虛榮の夢を追ふてゆく　公二
三十は越してるだらう耳隠し　聽松
耳隠し技巧的なる歩きやう　卯三
事務服の方が釣り合ふ耳隠し　光路
耳隠し理智に結んだ冷かさ　同
耳隠しこゝら邊りの人でなし　同

◎

耳隠し遲く長屋の辻を折れ　勇宗
耳隠し平凡でない口を持ち　山茶花
わらわれてゐる病人の耳隠し　皎月
ばかな事嫁かぬ氣でゐる耳隠し　愛子
耳隠しらしく歩けとは　たけし
耳隠し似合ふにされて小さくゐる　四方路
丸すぎる面を氣にして耳隠し　雷相
耳隠し親子切りなる佗住居　明果
耳隠しやつぱり無智な女なり　文芳
奥様のよりは似ふた耳隠し　突支坊
耳隠し工場街を通りすぎ　悟岩
二等車の窓に引き立つ耳隠し　新水
耳隠し甘い人ねと嬌態を見せ　專路
新參の女給へ賞める耳隠し　狂雨
美しい叔母さんといふ耳隠し　立々子
耳隠しバツ〳〵〳〵と歩くなり　光路
ウエーブが何うのこうのと耳隠し　無鬼
武裝したのでないのなり耳隠し　雷相
日曜の約束をして耳隠し　嘉月
耳隠しの寫眞も出して比べられ　今雨
男性的を好んでる耳隠し　皎月
ウエーブを賞め合つてゐる耳隠し　市公

秀逸

この鼻が何うにもならぬ耳隠し　光路
耳隠し輕蔑をする眼に出會ひ　秋刀魚
夏休み後四五日の耳隠し　明果
三角の戀の中なる耳隠し　喜由
供をする下女のやつぱり耳隠し　醉亭
男といふステツキの要る耳隠し　町二
耳隠し今日メーデーの第一線　花夢

五客

青蠅のやうないでたち耳隠し　町二
その中の一人似合はぬ耳隠し　與訪子
卒業の近いある日の耳隠し　嘉月
現實は蹉跌ばかりの耳隠し　光路
お針子の申し合せた耳隠し　萬樂

三光

處女といふ氣持へ出來た耳隠し　柳影
倫落の姉とは見にぬ耳隠し　狂雨
工場を汚れて戻る耳隠し　柳影

（小感）この句には近代的縱橫線を遺憾なく表し得てゐると思ふ。

F
踏切 四七49
船 17
G
號外 三九44 四八67
H
花電車 六13 二〇14
橋詰 六15
四四55 帆柱 五四53 二四31
橋 四一47 五八48
葉書
日歸り 五五59
I
筏 八16
音信 五五59
J
自轉車 五〇58
巡航船 五二52
K
交叉點 二五21
書留 二五22
小舟 三一17
四七50
汽車 三二22
四六49
空車 四〇12
片道 四二45
ケーブルカー 四二52
假橋 四三48
小包 五三54
M
密航 三三33
四〇30
N
南海線 一二37
年賀狀 三七35
乘替 五八49
R
ラブレター 四六52

洲本吟行

淡路の夏

吟行記を書くやうに頼んで置いたところが云ひ合はせたやうに、出かけるところと歸る船の中ばかりである、それでも寄越した人は殊勝な心がけだが、料理付の藝妓の値段に心を動かしたり、海水浴でいゝ氣になつたりしてゐた人達はどうしたんだらう(編輯局)

淡路行！何事を措いても行かずばなるまいと、起きたのが午前七時。朝風呂にも入り、散髪もする氣であつたが、今はそんなことをしてゐる暇もない。大急ぎでタクシーの客となる。時計を見ると七時半、キツチリと間に合つたが、天保山は人の山だ。漸〳〵路郎先生を見つけ、やつと安心(四五麿)

いつも無頓着さの大乘を發揮する者は萬よし老である。此の日の洲本行にも例によつて船は將に天保山を出帆せんとする間際になつて、先頭に立つべき社旗を悠々と擔いで殿をうけたまはり、ヤア〳〵〳〵。

此の團體一番尻の旗で知れ　(琴人)

急行船淡洲丸、さぞかし乘心地よからんと思ひしに、意外〳〵、暑さは暑し、人のすし詰、沖に出ずればと思ひしそれすらも裏切られたみじめさ、多郎)

淡洲丸ははち切れさうなお客を降してゐる。『川柳雜誌』と染抜いた三角旗の下に集つて聞けば　三熊館は滿員だから先ケ峰へ變更だといふ(圓角)

先づ私の眼に入つたのが青苔の生へた屋根瓦深い庇の下に娼婦らしいのが見える。潮風のためであらう、色は黑い(四五麿)

何んでもよい、早く宿について裸になればたまらんと、着くが早いか二十幾人の裸ン坊が出來る(圓角)

一同廣間へずらりと並ぶ。先輩も後輩もない、打解けた會合の氣兼なさは何んと云つても嬉しかつた。先生方も先輩の方も皆、眞面目に控へてゐられながらも、ひよこりひよこりと洒落が飛び出すありさま(四五麿)

ほろほろと白雨が來る。陽が當つて居るので狐の嫁入りだと云ふものがある。(圓角)

萬よし市議、無產黨の激務に、すつかり平右衛門の科白を忘れてしまひ、かほるさんのお輕困るまいことか、チエー兄さんはナア……。

ささささささ其の通りにて幕が降り(琴人)

それから三熊山へ登山する。萬よしさんの健脚ぶりに驚く。口も八丁、手も八丁と聞いてゐたが、足まで八丁だ。まだどれだけ八丁が隱してあるか知れない、ちと怖ろしくなつた(四五麿)

山道到るところ裏白茂り、お正月のごけさをしのばされた(多郎)

山の頂きに茶店がある。若い美しい娘さんがゐた。多分姉妹だらう。淡路の名所より、此方がよさそうに思つた。其前に折右衛門作といふ狸が二つ、何の靈驗があるのか燈明が上つてゐる。二人の娘は此の狸が化けたのではないかとも思つて顏を穴の明くほど見たら、眞ッ赤にな

つて顔をそむけた。矢張り人間だ。ホツと安心する。と又例の狸が意地悪い眼付で睨む。

折右衛門の狸が茶店ねらつて居（四五麿）

午後六時、洲本の風景に名殘を惜しみて船に乘る。乘る時の混雜は大變なものでした。漸くに乘り込んで甲板へ二柳子さんのお骨折で川柳雜誌社席を取つて項いた場所へ着く。滿員で狹いけれど讓り合ふて座る。私のそばにはかほるさん、四五麿さん、ひろしさん、お旅支部の方々と琴人、左の横手向ふに先生が座つてお出でした。月夜の航海はよいものですと被仰つてる聲が聞える。雨がぽろついて來た。そら大變と洋傘を二三本ひろげると濡らすほどでもなく止んでしまう。彼方の方ではさいぜんから、紅屋の娘を唄つて騷いでゐる。こちらでも何か唄つてゐる。間に狹まつておとなしいのは川柳會の人達ばかりです。

洲本雜吟の作句も側が賑やか過ぎて出來ません。その内に餘り混雜するのでしろの方に在つた紙包が破れて何か轉げ出る『誰のだ』と云ふと『萬よしさんのすもゝだ』と問答が始まる。此の時萬よしさんは船室へ行つて留守。ごなたか『喰べてしまほか』と云ふ。『淡路から買うて來いでも大阪にたんと賣つてる』と云う人もある『大阪で買ひ替へさけばゐい』

こそろ〳〵李の命が危ふうなる『いつそのこと海へほかしてもたと云うさけばゐい』と小さなすもゝが關取のやうに邪魔がれる。『さうかて勿體ない』と皆が手を伸して一ツ二ツ口の中へほかしはしめる。私も悪になつて一ツよばれる。さうこうするうちに全く日が暮れて彼方の島々には灯が見ゐはじめる。大阪の空に花火が揚る。赤いビーズのやうにチカチカと街の灯が輝いて見ゐる。それへだん〳〵近寄つて行くのも美しい眺めです間もなく棧橋へ着く甲板から降口に當る恰度よい所に居たので樂に船から降りられました。（壽女枝）

船室には暑さのため誰も居る者がないので、甲板は芋を洗ふやうだ。萬よし老愛他心を發揮して、一人でも減れば樂にならうと蒸風呂のやうな船室へ閉籠つて船が棧橋に着いても白河夜船、漸く探し出されて「此處は何處だ」と云ふ落ちつき方（琴人）

紫の旗を高くふり川柳雜誌社萬歳を三べん唱へ散會したのが九時頃でした。（壽枝女）

＝洲本雜觀＝

洲本町工場もあつてけむをあげ　町雨

一泊をしたい洲本をあとにして　同

同　琴人

大阪が見ゐる見ゐるこ船がつき　同

蟬の音に淡路島こは受けこれず　圓角

繪はがきを洲本で書こ持ち歸り　同

鳴門密柑我も一籠まねて買ひ　路鳥

込み合うてこれ身投げも出來かね　同

鳴門密柑船をおりたら重たかろ　壽枝女

ひこ杓を乞ふた眞水の嬉れしくて　同

ドラが鳴るこ早や酔うた氣になつて　多郎

飛行機に乘るこいふ人船に酔ひ　同

去らば〳〵洲本はしぐれかゝるな　彩秋

景もよく涼しい風にちこおくれ　四五麿

一日の休暇洲本で雨に合ひ　里十九

宿につき降つたがよいこ負惜み　飛佐志

蓑が孚いた海水浴も午後の五時　翠夢

生ぬるいラムネに三熊山の汗　ひろし

遠淺を母に知らせに走つて來　二柳子

三熊山みづぎのまゝで登つて來　同

歸る船影が出てゐるのを見つけ　路郎

先山がテープの上の方に見ゐ　同

船が出て洲本は波の音ばかり　同

△吟行參加者。路郎、紫舟、清、萬よし、二柳子、ひろし、琴人、壽枝女、雨町、圓角、路鳥、多郎、彩秋、四五麿、里十九、飛佐志、翠夢、かほる。その他大人や令息達。

△終りに、當日お出迎え下さつた洲本町役場の方々並びに會員一同へ特にお土産をお惠み下さつた洲本町長に御好意を感謝いたします。（本社）

家

福田山雨樓

家を移りたいと云ふ考へがかなり強い潜在意識として時々頭をもたげる。昨冬重患に襲はれ、今春漸く全快した際にも轉居の意が動いたし、久しく子供の出來ぬことにも家相に結びつけた相談がもちあがつた。暑いにつけ寒いにつけ勝手な難癖をつけて見る、屋根を直しても〳〵雨漏りが止まらぬことに殆ど愛憎をつかしたことが一再でない。

◇

けれども只今の家に住みなれてもう足掛け七年になる。恰度關東震災の少し前に新築の出來上るのを待ち兼ねて這入つたものだ　あの震災の際轉げた庭の石燈籠が据ゑ直されて今も尚自分を慰めてくれる。何程かの役目を、その沈默のうちに續けてゐる　裏庭がかなり廣くて近所の子供が一番よく來て遊んでくれる賑やかさ、稀有の旱魃にも井戸水がよく出て、近所から貰ひ水に來られるなど、時に優越感を覺ゆる事もある。或春にはまんまこ泥棒に見舞はれて、拵へたばかりのオーバーを持つて行かれたりした。二軒建である隣の何人かの借手のうち遂にその二三ケ月間に這入つてゐる人の顔も知らないうちに、綺麗に夜逃げした組もあつた。

思へば限りなき愛慾の家だ、情緒てんめんたるもの亦なきにしもあらず。

◇

その家にも時には飽きが來る、薄情千萬な話だ、しかし一年中の最も多くの時間はこの家を慈母の懷として、こよなき理想鄕として禮讃し、不拔の根城として擧守してゐる。たまに感ずる不自由さ手狹さは、時に取つて鞭韃の種ともなる大阪に來てからもう五、六回家を變つた自分にはその家々についての思ひ出が懷しい。更に又遡つて自分の成長した養家や、實家の聯想は遂に消し難い烙印と

して腦裡に點綴、夢の國を辿る。その足元にも、やがてさうした思ひに耽るであらう幼兒か、晝の疲れに寢苦しい手足を蚊帳の外に出してゐる。

ラビ

岩本素人

僕を先生と稱ぶ男が時々現はれて來る甚だうらこそばい譯だが、他にもまんざら無い例ではないから、ひやゝ〳〵思ひながら涼しい顏で濟まして居るが、この僕を『ラビ』と呼んで呉れる男が大阪に一人ゐる。事茲に到ては寒中に氷でなぐられた思ひがする。始めは人中で『ラビ』とやられる事には迷惑に近い感じて聞いてゐたのであるが、それが今では早四五年も續いてゐる。このごろでは、『ラビ風呂が沸いた』。『をいしよ』『ラビおかんがついた』。『ヨイ來た』てな調子で誠に以て『ラビ』がお手輕くなつて來た。これをキリストに聞かしたらこ時に思ふ。

からすかご

松丘町二

≪黃吻錄其の二≫

○

自分の今までに創作してきた句に、何こ嘘の多かつたことよ。貧しい經驗こ、淺薄な認識で、乏しい用語こ、僅かな技巧で、でつち上げた數千の句を顧みるこき、見失はれてゐた蓄音器の針が轉げ出たやうに、ぴかつこ光つた眞實の句が、一つでも見出せるか知ら。雜吟への拔句數の多寡に、作家こしての名譽をかけて競ふここの愚かさから、やつこ解放された自分なのだ。勉强しなければならぬ。

半文錢氏の近頃の句

蟻を見給へプロレタリアート諸君に就いて。

此の句を通じて氏は、被搾取階級の人々に何を云はうこされるのでせうか？君達の貧乏するのは尙働き方が足らぬのだ君達プロ共は文句を言はずに只默つて、蟻き如〳〵無自覺に働き給へ、こでも云はれるのだらうか？

それこも僕の觀方が誤つてゐるのかも知れない。我等ならかう云ひたい。

蟻を見給へプルジョアジー諸君

○

無感動の概念句　沒個性の客觀句、無撰擇の報告句、平明の皮を被つた平凡、安易にして品なき機智、かくして傳統川柳も漸くマンネリズムに墮して行きつゝあるのではないか。

古川柳の見本、この見本によつて單に複製したに過ぎぬ傳統作家の見本、それらは多數の無自覺者に依つて、典型こして崇拜され、更に〳〵複製され、かくして定型は無數の沒個性句を鑄造しつゝあるのだ。

○

同樣なことガ新興川柳に就ても云へる『概念がタンクに乘つて驅廻る』（之は或人の言葉を借りて）やうな句、引越し荷物を滿載して見せつけられる樣な感じの句、然らずんば迷へる哲學者の囈言、誇大妄想狂か恐怖病患者の燥音等々に類する句の如何に多きことが。

○

こは云へ本當に頭の下る樣な句は、新興川柳のうちに發見することが多い。その藝術論も敎へられる所が多いが、議論の前に先づ自分の用語の定義から先にしてかゝつて頂きたい、こ思ふことがある

○

川柳は沒個性詩でよいこ或人はいふ。個性のない藝術があるだらうか。我等の川柳が藝術でも詩でもなくていゝ筈がない。主觀の最も直載な象徵！こしての川柳を尊び且愛するものである。

○

『矛盾したことを云つて俺を苦しめて吳れるな。人は何か云ひ出した時は、もう迷ひ出してゐるのだ』こゲーテは云ふ。併しだから沈默せよこは云はなかつた。川柳人こしての僕は迷ひ出してゐるのかも知れない。

きんまんもん

蛭子生

前稿『木魚講』の續きである、

木魚講キンマンモンの神のやうの神樣は一寸說明して置いたが、馬琴先生の名作椿說弓張月には、例の學者カタギで詳に記してある、長いから略したけれ共、參考のため載せた方が、よいこ思ひ直し、其儘寫そう、琉球國では殊更こキンマンモンを尊信する。

君眞物こ稱する神は、開闢以來國の守護神也、其神に陰陽あり、天より降れるを、キライカナイノキンマンモンこ言ひ海より上れるを、オホツカケラクノキンマンモンこ言ふ、（一書に、オホツクチクノキンマンモンこしるせり）、此神をり〳〵出現し、託女に託宣して、處々の拜林に遊ぶ其託女三十三人はみな王家にして、王妃もその一人也……彼君眞物もし怒る事あるときは、國人腕折爪折こて身潔やうの事をして、これを拜み慰る事いこ切也、又七年に一回、十二年に一回、出現のあら神ありて、國中はさら也三十六の屬島まで、すべて一時に出現する事あり、これをキミテスリこ稱へ……又オウチキリ（一書にフウナキウこしるせり）こいふ海神のあらはる事あり、其神の身丈一丈あまりにして、睾丸殊に大小があり、よりて褌を結びて肩に掛く、これらの神をすべて君眞物こ稱ふ、是さらに浮たる爲語にはあらず、日本の僧、彼國にありける日、正しく見たるよし、骨董錄中、琉球事略に載られ、又五

雑俎に、謝在杭が云、中國の人琉球にいたり、彼に代つて治庖するもの、親り神の出現するを見たり、その聲喝々として蚊の如しといへり、かく奇やしき事ありといへども、五穀を傷ひ國人を害ふ事はなかりしに、是年山の神・水神、いたく荒れ嗔りて、海山のかせぎ その便をうしない、樵夫漁翁等、いたくうち歎くよし、その聞にありければ、中婦君ふかく歡び、ひそかに利勇と示しあはして、腹心のものを處々の間切に遣し、國王、忠臣の諫を聽給はで、寧王女を中城へ移し、世子を立給ふゆゑに、キンマンモンのあら神怒りて、この禍を降し給ふとぞいはせける云々――尙處に君眞物の神が出現して居る。

木魚講に就ては、嬉遊笑覽に、『乙州か、それ〳〵草、近き頃貧暇無祿のやから、無情講とて組〳〵をさだめ、少しづゝの懸錢を集め、其中に死の先だつものあれば、其つみ錢を以て講中より合、のべ送り不足なき程にとり調ふ、近頃此事大に流行り、木魚講と稱し、木魚に紐付て首にかけて、これを打ツ、念佛をとなふれば、其外これにつれて大聲に念佛してのべ送りするなり』と。

無情講とあると云ふが、ヘンに思はれる、無常講が理窟は通る樣である。新三百韻（黑我）

秋知らぬ男はもるゝ無常講

無花果

關本雅幽

一昨年の秋、郷の弟が取木にして呉れた無花果を植てから『屋敷内に無果花を植ること病人が斷ねないつて誰某さんが言ひましたよ』『そんな馬鹿化た事があるものか』いや『無果花は勢力の良い木だから家の人が瘠せるつて、みんなが言ひますよ』『ほんに僕はよゝ瘠せてるねなぜゝ夫婦寡しの私達のこんな會話を當の無果花は一向構わず、ぐん〳〵成長して一坪餘りの庭を薄闇くしてしまつた。

こころか、さる日四五間も離れた漆喰場修繕の爲め人夫が掘つて居るのを見ると破損した箇所から木の根が水を飲みに來て居るのである、不思議に思つて床下を調べて見ると、僕の家の床下は、一面に無果花の根で張りつめられて居るでわなるか、驚いたのは妻である、むしろ恐ろしがつて居る。だが僕は妻をなだめて、成るべく屋内に光線の入るやうに、幹を引縛つて屋根の上に枝を擴がらせ、根元に藥や雜魚を埋めてやつた。そうして鈴なりになつてゐる實を樂しみに毎日怠らず水をやつて居る。

汽車の中

若井たけし

汽車が京都驛を出る頃には僕の前に新しい一組の男女が席を占めてゐた。

男は會社の重役タイプ。女はすき髪にしてゐるが顎の邊りから頸筋へかけての厚化粧に藝妓であることがよく判つた。

僕はうつむいて眼を閉ぢた。

男『これから長崎までなかなかやで』

女『長崎て、おやしろさんよりも遠うおすか？』

男『うん、そらずつと方角が違ふ、もつと遠いくしてここや、おまに、おなかすいてゐへんか』

女『……』

男『辨當ごうや、要らんか？』

女『結構ごす』

男『アイスクリームは……』

女『結構ごす』

……僕は眼を開いて女の顔を見直したこの時煤煙が入つたのか遽に女はハンカチを眼にあてゝ、兩手で押へた。

蒸暑い空氣だつた。

女の手はいつまでも離れなかつたので何故か泣いてゐるやうに見ゐた

（八月九日神戸への車中にて）

病褥の文と句（二）

大窪文芳

失業して一ケ年半から徒食した上へ患つて五ヶ月程を經過した。危險期は母の信心や妻の看護の根氣で免れたが、金と云ふものに恵まれず、蓄へがない後悔をはじめて味はひ、母や妻に一通りならぬ氣苦勞をさせる。年の瀬も迫り貧乏生活のどん底へ皮肉に、近い杵の音が響いて來る。兒を持つ自分には境遇の上から斷腸の思ひがされた。此んな中でも川柳は忘れられず、辭世句めいた物を作つて妻に示し悲觀させる。何か入質でもして來たらしく、無理工面で買つた高價藥の事情を察して呑む。自分は幾度も手を合せて服用した。そうして牛乳に重湯に一寸の立居にも杖の要る體軀であつたが、漸く獨り歩るきが出來るやうになり、少々の運動がして見度く久し振りに外出をすれば、病みほうけた。自分に呼びかけられては面倒と見てこつたものか知人が顔をさけて通りすぎ自分を悲觀させる。大分に歩行も樂に出來だした頃、重患中一心に、お詣りして母が祈願を籠めた、神樣、佛樣へ指圖に從つて禮詣りをした。昨今では川柳の句材によくされる、全くの病上りで日課の樣に腕へ力を入れて力瘤を出させたり、郊外運動へと努めて居る。之れを句にしたのが左記であり、文章にしたのが以上である。岩本素人氏夫妻にて見舞のためお訪ね下さつた、六月廿七日の翌日之れを書く

世の中は永患ひへ遠くなり
利害があつてよく來る見舞
易者から皈り病褥向きな替へ
對心へ遠い心の眼を据ゑる
長病ひ妻の根氣の顔白し
病み續け辭世句めいたのを見せ
高價藥無理な苦面を知つて服み

知る人が病みほうけた顏をさけ
病上り母の指圖で禮詣り

腕時計

悟空

今日の暑さにシャツとステ、コと云ふ涼しい姿で時計屋へ使ひにやらされた。

時計は修理出來てゐたので受取つたがさて自轉車に乘らうとすると持ち塲がない『腕時計や腕へ卷いたれ』と腕につけたニッケルとクロームの二箇の腕時計が月給の遠くのやうに光つてる云ふまでもなくニッケルの方は僕。

しやん

和田源坊

關西線今宮驛から東へ四丁程の所に、番人の居ない踏切がある。南側から渡らうとしてフト氣附いたのが、幾星霜風雨にさらされて遠目からは文字も判り難いほどに黑ずんだ立札。

しやんを持ち直して一寸お待ち下さいと、ある。

ハヽフ、さては失戀自殺が度び〳〵あつたのだな……と、既に早合點をするところ、その次ぎの行に

大正×年　月　施主　×田××郎

なる文字を見出して、ソンナ意味ではないことを知つた　そこで、大正・年といふ年に、しやん　シャンなる語が通用？してゐたか……を考へてくると行詰つてしまつた。

おそらくは此の施主　思案と書くべきを假名にすべく發音を斯く誤つたものと思はれるが　直接間接に無言の番人となつて此の立札幾何の人命を救つたかもしれない。

亦一面には、無教育者の發音が如何に眞面目に間違つて傳へられてゐるかを如實に物語つてゐる事に思ひ及んで、危ぶく笑ひを嚙み殺して過ぎた。

字の通り讀んだ地名を笑はれる

選句發表前後

上田柳影

雜誌を見る

○月○日午後七時於日本橋倶樂部

○月例會

兼題○○○　○句

會費○十錢

作者は全力を傾倒して兼題の○句かをもつて出席する。八、九時は句作に熱中する時間である。作者は頭を前後左右上下して非常なる熱と力で一生懸命に作句する苦作である。しかして後何句かを提出するそして、その苦心になる作品を發表される時になると　何かしら心の躍るのを覺えて固くなるのである。

拍手に迎へられて選者は選句をよみある。『

×××××××××五客×××人地天、

軸…拍手。結局作者の苦心の結晶になつた句が入選せなかつた。

ある柳友は二句三句入選してゐる。少からず自尊心を傷つけられた氣持でその選者には好感がもてない。嫌である處が天に入選する、作者は非常に喜ぶ。さうしてその選者には非常な好感をよせる。

△

句會は句作力を養ふところで競句場ではない。そして選者は指導するものである作者はよくそれを知つてゐるしかし乍ら選者にたいする瞬間的ではあるが好き嫌ひの心を棄てることが出來ない。

（四、七、二一）

おさんどん

植田湖舟

東の空のしらむ頃ねむた眼をこすり乍ら起きなければならぬおさんどんの悲哀まだ世界は眠つて居る。何處からともなく聞こへて來る。一番電車の音ごろ〳〵ごと馬力の音も聞こへ出して來る。起きるなり大きなあくびをする。それから便所へ行く洗面をする。ところがこのおさんどん感心な事に洗面がすむと毎朝の如く東に向つて日輪を拜む事にきめてゐる。彼女の毎朝の仕事はかたにはまつた如くそれから〳〵へと進んでゆく。

飯が吹く、味噌汁が吹く朝のすが〳〵しい風がおさんどんの赤い顏をなぜて行く。

この時奥の方でごと〳〵と音がし出だす。この音こそ奥樣の御起床である奥樣は奥樣らしく先ず鏡臺に向つて髮をなでつけてから臺所へ出張になる、おさんどんはすかさず奥樣お早よう御座いますとやる。

お梅や出來ましたかとおさんどんは呼ばれるおさんどんの名はお梅と云ふらしい顏に似合ぬなか〳〵いゝ名前である。

これが奥樣からの毎朝のお聲がゝりである、この時に奥樣がお梅やと呼ばぬ時はかならずその一日中奥樣の御氣嫌が惡い夫婦の仲の圓滿は毎朝お梅やと氣嫌よく呼ぶか呼ばぬかにある

おさんどんもなか〳〵この呼吸がむつかしいおさんどん此の家に來て五ケ月程しかたゝぬがなか〳〵ようりようがいゝ

もうちやんと奥樣の呼吸を呑みこんでしまつてゐる。

食臺が運ばれる其の内にチン〳〵と六時を打つすると奥樣は寢室へ行つて貴方〳〵々々を連發する

貴方起きなさいね……

もう六時が鳴りましたよ……ね……

すると……うーんと云ふ旦那樣の返事が手に取る樣に聞こへて來る。

起してから、ふたゝび奥樣は臺所へ出張する洗面器へ奥樣自ら水を張る。

そこへチョビ髭をはやした旦那様その人が出て來る。

お互に顔見合せてにつこりと笑ふ

見せつけられる おさんどんは ずいぶん心苦しい思ひをせなければならぬ食事がすむと時計は七時半を指して居る。

旦那様の出勤となる奥様に續いておさんどんの見送りこれが毎朝の日課となつて居る。

朝晝晩奥様のさしず通りゼンマイじかけの如く動いて行くおさんどんの働きこそ人生に平和の花を咲かす一つに數へられるであらう其の報酬としてつまみ食ひなるものはおさんどんのみにゆるせ

おさんどん故郷の夢を起こされる

おさんどん猫にあてつく日もありて

（一九二九・七・二七）

二上山上にて

庄 万よし

電車道の二階借りではこの暑さでは讀書も作句もあつたものでない。不良住宅問題紐育市政の研究なぞ、私の市政上擔當してゐる堅苦しい一二三冊を鞄に入れて、二上神社前の驛から利久で二十四丁を日盛りの天頂にたどり着く勿論人の子鼠の子一疋もゐない。

私は年中午睡黨であるがこういふ山上を獨占して、万よし一流の鼾聲を揚げるのは弘法が始めて高野へ上つた位な愉快を感じるのである。

老松數株の間に萩の十數枝を並べて手拭を敷布とし利久を枕に眞裸の大の字を極める。

暑いが流石立秋の空は高い。唯物史觀研究の百ケ日から神話時代への大逆轉である、大津皇子の墓を前にして、住宅問題は水草を追ふて移る、原始時代のローマンスへ思惟の大回轉をやる。

産業の科學的進歩は人類をプルとプロとにハッキリ區分して新興無産階級が資本主義の自然的崩落の後を受けて次の時代の社會の支配をなすものであることは辯證法の證明する定理であるが、この無産階級の政治や經濟上の完全な地位を獲得した後でなければプロ藝術は大成しないのである。

それまでは無産者としても印象派にも自然主義にもローマンチックにも藝術的ショックを感ずるは、止むを得ない社會現象であらう。

殊に個人と自然の關係については風、山川、早木、花鳥、日月 星辰 への咏歎詩情に到つては十世紀や二十世紀で、そう變化するやうにも思はれない、そしてそれは空氣を呼吸して生きるのと同樣時代の進化の外に超然として君臨してゐるかの感をさへ與ゐる、詩と美とは社會と道德とに超然たる處に不朽の生命を把握してゐるものであらう。

人間の壽命へ松の露が落ち

午睡する腕へ午睡に止る蝶

各地柳壇

川柳雜誌社
神戸支部

青明忌（神戸）

八月拾日夕於四宮神社々務所

青明藤村一氏は神戸の人、その柳壇に殘せる足跡の數々は川柳人の周知せるところ氏と親交ありし主幹の意により、川柳雜誌社の年中行事として多年その忌を營み來れり、來會者廿三名、故人を偲びつゝ句境にひたる特別講演として紋太氏の「青明と神戸」主幹の「青明のこと」を聞く。故人の面目躍如たり。酷熱堪ゆるに難き夜なりしも最後まで緊張せる會合なりしを喜ぶ。＝楊井二南報＝

（芳名錄より）

石竹、九葉、紋太、ひろし、里十九、觀月、九の字、志郎、啓、睡花、嶺月、山雨樓、路郎、一狂、竹風、重陽子、千年、卯生、番翁、東洋鬼、市公、二南、華水

席題　選手　互選

野球狂選手の樣な口を利き　竹風
勝つたのか負けたのか選手泣いてる　里十九
選手から見れば扇子の忙がしさ　山雨樓
決勝點選手にがりきつてゐる　市公
一點を入れた選手の名を覺え　志郎
選手皆笑つて今日の記事になり　重陽子
負けぬ氣を選手に蒲團着せてやり　睡花
家にゐる選手の母の氣が疲れ　二南
舊選手コートのそこら歩いてる　卯生
女とは思へぬ選手嫁になり　ひろし
胴上げに選手天井低う見る　嶺月
腹卷を補缺も同じ色で寢る　一狂
合宿へ選手の姉もやつて來る　啓
外人の選手兎に角もてゝゐる　同
三十五度選手の泪砂に落ち　路郎
もう選手背廣になつた口をきゝ　同
算盤の球をはじかぬ選手なり　石竹
ホームラン王の氣持を續けて來　同
選手よく談じ團扇の骨を折り　紋太
別れてのあとの選手の痛い脚　同
腕組みの選手に雲は低う垂れ　紋太

席題　汗選

ソイシヤツも脱げと云われるほど汗
行水へ其の日の汗が浮いてゐる　嶺月
殘業の汗を尊く妻が見る　山雨樓
健康の一つ大きな汗が出る　志郎
飯のあとおなかの汗を笑はれる　九葉
赤ちやんは赤ちやんの汗鼻に持ち　同
汗くさい手へ日給を渡される　啓
臍へ落ちる汗がどうにもならぬ　同
鎧戸を落す手に手に汗を見る　一狂
挨拶もせずに扇風機を向ける　同
玉の汗ポチリと飯の中へ落ち　觀月
汗の馬冷し飴屋の前で待ち　同
子を避暑にやつて儲ける汗をかき　東洋鬼
（人）汗くさい手拭にして戻すなり　同
（地）洗濯に汗は黄色いなと思ひ　嶺月
（天）汗かいて寢る八月は俺のもの　觀月
（軸）忙しさ鶴りのない汗を見せ　重陽子

兼題　聲

聲のして闇の香水流れくる　紋太
引込みのつかぬ大きな聲を揚げ　路郎
母の聲蚊帳のすそまで陽がせまり　樂鳥
もう少し大きな聲が出んのかい　京郎
風が聲たてゝ今朝から秋になり　一狂
浮袋まだ泳げない聲を立て　觀月
戀人の聲は受話機にひゞき過ぎ　番翁
這ふ虫へ年も忘れて聲を立て　山雨樓
お悔みへもう泣き聲の禮になり　竹風
巡査むつつり馬叱る聲きいてゐる　重陽子
母親の聲は屆かず水を撒き　嶺月
氷屋に聲が屆いて疲れ切り　紋太
（人）秋立てど故人の聲を知らぬなり　睡花
　　同
　　一狂

地）聲變り姉に着物を直される　九葉
（天）母もめば母は空ろな聲になり　卯生
（軸）聲のする方へ資本家氣をつかひ　路郎
席題　大　男　一　狂　選　ひろし
大男カラ〳〵　晴れた笑ひ聲　觀月
大男まだ編上げを履いてゐる　九の字
大男帶から下がだらしない　二南
大男返事を二へんして了ひ　嶺月
体重ではねられたんだ大男　睡花
大男重役の娘と馴れただけ　山雨樓
大男らしく丈夫な爪を見せ　紋太
失望のいとも大きい大男　志郎
大男六神丸をのんでゐる　東洋鬼
半鐘へ腰を上げない大男　番翁
大男剩りを忘れて歸りかけ　同
大男笑つてのけて顧みず　路郎
大男母を輕舟に乘せ　同
觀覽席をなやましにゆく大男　觀月
（人）大男そう早口にしやべられず　路郎
（人）大男一町先をまだ歩き　東洋鬼
（地）大男蛇をかしな程怖れ　紋太
（天）大男物のあはれは炙をすえ　ひろし
席題　長　旅　選
丸刈になつて長旅戻つて來　山雨樓
長の旅話相手が又變り　市公
長旅を戻り暫く門に立ち　卯生
長旅のカラ取替へる店の端　路郎
國を出た日をしみ〴〵と長い旅　重陽子
まだ旅の身なり湯の宿晴れもせず　睡花
長旅のこんな所で秋にあひ　東洋鬼
冗談のあとが淋しい長い旅　紋太
長い旅家にはうまの合はぬ妻　九葉
長い旅やつぱり酒がやめられず　同
（軸）捨石を拜みたい氣の長い旅　ひろし

第六回川柳雜誌社

松山支部例會（松山）

岩本素人報

席題　氷　清記　互選
三味線のそばで氷は溶けて行き　武子
氷店コップに錢の音がする　三雪
女客氷殆んど解けちまい　流矢
氷より飴湯の方を飲むと言ふ　計加
氷屋は欠伸で雨の空眺め　青帆
自轉車の荷受けの氷へ陽が強い　柳女
氷屋の暗い後ろで錢を出し　ちよろ松
立ち寄つて氷よばれる村巡査　秋無草
氷屋の汗へ皮肉を浴せかけ　水樹
氷柱の中に果敢ない花が咲き　夢郷
氷店で姉妹同じものを食べ　大鷲
贅澤と別な氷の日が續き　同
氷詰生きた魚の樣に賣り　五月
看護婦が割ると氷はおとなしい　五健
名優の樂屋は燦と花氷　同
夏の魚氷の重味勝り居り　川の字
遠慮の氷子供が覗いてる　素人
丁稚呼ばれ氷が日にあるのなり　同
温泉から出た氷しみじみ齒にしみる　冷々子
ほしがつた氷に虫齒痛み出し　同
兼題　裸　素人選
臺所の裸へ御用遠慮せず　柳女
襖越し座敷へ裸申し兼れ　文芳
丸々と裸一尺程を匐ひ　雨眠
嘘した裸へ母は着せてやり　冷々子
裸の子抱いて裸の涼みに出　薩城
今日の糧しぶ〳〵脱いだモデル臺　青帆
おみくじは裸に成れと判じられ　武子
珍客にされて裸になれぬなり　秋無草
いゝポーズ裸体初學者まご〳〵し　春市
（佳）裸の子別莊の子に負けて居ず　逢人川
裸から裸へ西爪渡される　玄々子
男の子自慢で撮す丸裸　句浪人
坊ちやんの裸出臍を見付けられ　五健
裸の子廊下が盡きて庭へ逃げ　流矢
青簾立ち止まらせる裸が居　水樹
呼ばれてる階裸の影を見せ　同
出稼ぎの裸の儘で戻つて來　夢郷
遠出海女乳をもみ〳〵もぐるなり　同
兼題　野　球　水樹選
ホームラン敵も味方も氣を呑まれ　冷々子
涼み臺野球熱の人斗り　三雪
群集の中へボールが逆に飛び　雨眠
戞飛ばす球にグロンド破れる樣　玄々子
黄色い聲出して應援する日傘　青帆
選手よりファンの方がくたびれる　青市
八釜しい親父野球の講義され　嘉久馬
通信に野球に息をはづませる　大櫻
ホームランあの一點が物を言ひ　雨眠
惜敗に選手ションボリ歸るなり　計加
一點を漸く入れたすべりこみ　花の助
（佳）天祐の樣に最後のホームラン　句浪人
（佳）鮮に盜塁をした砂埃り　薩城
（佳）やはに振る樣なバットの三塁打　柳女
（佳）滿塁へ投手自信があるらしい　流矢

(主)お情に野球選手で卒業し　松葉
(佳)そら打つた走つたフアン醉ちま　五健
(佳)息づまる様な仕合へ蟬が啼き　秋無草
(人)あほらしい顔して野球から歸り　薩城
(地)ゲラシドの廣さへ球の響く音　武子
(天)滿壘に投手悠々靴の紐　五健
(軸)スタンドを動かす球の柵を越へ　水樹

兼題　交代　句涙人　選

交代の靴が響いて二時が鳴り　水樹
交代の提灯あげて夜水番　花の助
交代のもう十分の夢が覺め　夢郷
稻妻の中に歩哨は交代し　青帆
交代で水を汲んでる避暑の風呂　玄々子
交代で湯に連れて行く子澤山　五健
交代をせうかと覗く臺所　同
盛難の以後交代で夫婦出る　流矢
欠伸から覺めた所へ代交來　冷々子
交代に立つてやりたい親心　木陰
交代の辯士拍手で迎へられ　松葉
交代の前に煙草を一寸吸ひ　計加
交代へあと十分の長い事　雨眠
交代は欠伸を堀へ投げて立ち　秋無草
月の影で交代時間知る歩哨　五月
水番の交代寢てるのを起し　廣稔
交代のちと遲れたが不服なり　逢人川
交代に嫌はる友の待たれ居り　川の字
交代のサイレン待つ子へ乳が出ず　柳女
年上に交代一寸言ひ澁り　嘉久馬
妻と妾が交代に産み　素人

五　客

交代の女工鏡へそつと寄り　文芳

交代の夜番は暫し目が見へず　春市
交代へ全責任を背負つた顏　薩城
醉うて來て夜勤へすげなく交代し　夢郷
交代の話打ち切る笛が鳴り　五健
(人)交代に子が泣き夏の夜は白け　青帆
(人)交代で呑む岩清水尻を立て　柳女
(地)交代は來る早々の力貸し　抽園坊
(天)運轉が荒い交代する電車　大樓

川柳雜誌社加古川支部 **耽柳會第一土曜句報**（兵庫縣）

心配　水田五彩果報

心配心配を笑顏でかるう消す女房　青路
心配はコツプの泡に溶けてゆき　五彩果
心配へ暑中休暇が遊びに來　桐郎
心配の默つて渡す体溫器　同
もう他人樣ですと心配してゐる　泰山
心配は無口の永い日がつづき　尾秋
自暴酒の傍で小さく縮つてゐる　みや子
有り切りのやまこ命を縮めてゐる　芳水
心配の餘つて今日の自殺沙汰　洛陽

下足

支關の下駄一の字に主を待ち　芳水
よく見えぬ芝居下足を尻に敷き　青路
下足番に氣兼な樣な下駄をぬぎ　泰山
下足番やかましいのへ振向かず　五彩果
汗かゝぬ程度に下足番は出し　桐郎
滿員に下駄の包みが邪魔になり　みや子
下足番だけの取扱ひをし　洛陽
下足札つぶされそうに渡してゐ　尾秋

川柳雜誌社 **梅田支部句會**（大阪）　水谷鮎美報

兼題アッパッパ　かほる選

アッパッパ男の下駄を履いてゐる　觀月
盛花に足をにぢらすアッパッパ　鮎美
アッパッパで挨拶してる電話口　夕鐘
アッパッパはしりもとから呼びかけ　同
アッパッパ寢ても起きても同じこと　里十九
アッパッパ今日も八百屋をれぎろこ　同
(人)アッパッパ疊の匂ひ本を讀み　健坊
(地)アッパッパ母の手助け元氣よく　卜居
(天)ちと樂な暮しアッパッパを着て　觀月
(軸)アッパッパ夜はきれひな人いらし　かほる

兼題　人形　二柳子選

娘もう人形いらない年となり　健坊
流行をまづ人形に着せるなり　里十九
虫干に人形の着物も出してゐる　卜居
人形の着物が縫へる歲になり　觀月
背丈ほどある人形が慾しいなり　石竹
お隣りの子の人形はこけてゐる　鮎美
(佳)泣いて泣いて人形も捨てゝゐる　石竹
(佳)人形は殘されたまゝ夜となり　鮎美
(軸)寢かしたり起したり西洋人形　二柳子

兼題　風呂歸り　かほる選

風呂歸り南無阿彌陀佛でそうなり　里十九
風呂歸りざるそば二つ云ふてくる　夕鐘
口笛でもどつてきてる風呂歸り　健坊
風呂歸りのんびり空を眺めてる　同
風呂歸り何處のラッパかあて見る　石竹
風呂歸り時計のねぢを締めてゐる　同
風呂歸り西瓜を切つて皆を呼び　鮎美
風呂歸りまた茶をすゝる泊り客　同

風呂歸りすぐ寢なさいと叱られる　觀月
友達がもう待つてゐる風呂歸り　同　石竹
(人)風呂歸り八月號を買ふて去に　鮎美
(地)少々の事は氣にせぬ風呂歸り　同
(天)きりぐすを涼しい聞く風呂歸り　かほる
(軸)花道を通る氣がする風呂歸り

芦城川柳社

川柳雜誌社小松支部

二柳子氏歡迎句會

石川縣

八月一日於白山席　梶井井々樓報

連日の好晴に堪へがたい暑さの今宵、橋本二柳子氏を迎へた。海暑炎熱もために一變して嬉しい句熱となり、白山颪の涼風に甦る。出席者・思芥郎、加賀守、柳一路、晴天、松雪堂柳塢・錦水、松水、恒風、芥路、井々樓

雷　柳一路　選

雷へしつかり抱いた父の膝　思芥郎
夕立が霽れて雷遠く聞き　芥路
雷に夜店の足が早くなり　恒風
行水をあわてゝ仕舞ふ雷が鳴り　松水
雷に木馬を捨てゝ轉げ込み　柳塢

女の子　二柳子　選

女の子休暇になると使はれる　柳一路
キューピーさん抱へてれる女の子　松雪堂
女の子世帶の眞似もして見せる　加賀守
善し惡しに母の肩持つ女の子　柳塢
子守唄覺えて歸へる女の子　思芥郎
半分は親が云はせる女の子　錦水
(佳)晩酌の父へ女の子は唄ひ　思芥郎
(佳)遠くへは行つて遊べぬ女の子　加賀守
(人)女の子飯事ばかりさせられず　同
(人)君が代を無邪氣に唄ふ女の子　松雪堂
(地)女の子内へ歸ると拗れて見せ　錦水
(天)女の子履けない下駄を履きたが　同

川柳雜誌社

北濱支部小集（大阪）

七月廿七日夜　新堂勇報

毎夜々々日曜のよいであれ　一舟
傳票を又繰り直す扇風機　萬樂
死魚一つ眞夏の川を流れ行く　稔
中の島更けてはつきり土の冷へ　琴人

兼題　夏

船渡御へ眞夏の汗の顏、顏、顏　萬樂
屋上にアンテナ光る街の夏　一舟
濱寺は松と裸の夏景色　桂枝
夏休みの母はパンスる揃へとき　南生
にじみ出る汗に食事のはかどらず　伊佐美
フト立てば今日の暑さが押寄せる　稔
(軸・三十四度五度の夏なり牛喘ぎ　琴人

川柳雜誌社別府支部

湯苔吟社句報（別府）

小川三猿堂報

相談　評判　琴人　選

(天)またもとの論へ相談まとまらず　晃卓
(地)評判がなくなる頃に添ふて居る　晃卓
(人)相談へ片肌ぬいだ友を持ち　媚柳

席題　寫眞、引越　互選

寫眞では二三人の父に見へ　媚柳
そんなことあつたかな寫眞帳を繰り　豊泉
振袖の姉を見出す寫眞帳　葭村
引越の先づ表札を太くかき　三猿堂
引こしで思はぬ寫眞見つけ出し　流舟
〆切つた格子に行先かいてあり　夏宵
引こした先もやつぱり雨がもり　葭村

兼題　夕涼、星、瀧　互選

夫婦とは見へぬ二人の夕涼　媚柳
夕涼一人さびしい年になり　長松
夕涼露臺から呼ぶたばこ盆　晃卓
流星につい已れの身を案じ　長松
見つむれば次から次へ星のかず　夏宵
たどりつく峠へ明の星が冴へ　三猿堂
就職の口にあぶれだ宵の星　劍阿彌
たきの音なごりおしげに山を下り　長松
ありだけの汗たきつぼへたどりつき　豊泉
たきが見えそこで登山の飯にする　雨灯

川柳雜誌社御旅支部

第六回例會（大阪）

八月四日　川柳雜誌社吟行と行を共にして　櫻井圓角報

淡路島に夏の洲本を訪ひて、詩嚢を養はむとする熱心なる人々を乘せて走る淡州丸船中に暑さも厭はず選をして頂いたのは支部同人の深く感謝した所であります。

兼題　百貨店　路郎選

丸髷げも端ぎれを競ふ百貨店　路烏
デパートのおもちゃ母は無茶を云ひ　圓角
パトロンの顏色變る百貨店　〆緒
デパートにそゞろ歩きが人眼ひき　路烏
マネキンの樣な賣子を探して居　多郎
新妻に氣前を見せる百貨店　飛佐志
三越が自働車で俺れを送つてれ　圓角
買うとて値札ばかりを見て出た　路烏
(人)三越へ買物よりも見せに來る　翠夢

（地）手前では三越のお米ばかりです　飛佐志
（天）デパートを廻り廻るも女氣の　圓角

川柳雜誌社加古川支部 **耽柳會例會**（兵庫縣）

八月五日　水田　桐郎　報

兼題　夏祭

夏祭作り人形も映畵化し　尾秋
夏祭袖むすび合ふ白い顏　綠城
子澤山母親困る夏祭り　みや子
夏祭淋しい裏で逢つてゐる　泰山
夏祭りお嫁に行つた事も聞き　五彩果
逢曳へ空が明るい夏祭り　桐郎
走馬燈つぶされそうな祭の兒　同

兼題　車　掌

只乘と車掌電車と遠くなり　桐郎
注意する車掌の語尾は消へて行き　みや子
へべレケへ車掌恐しい氣にもなり　五彩果
客二人それでも車掌立つてゐる　尾秋
次ハーの聲から車掌動き出し　泰山
車掌目を配つてゐる交叉點　綠城

第二十回南海至誠 **川柳會句報**（大阪）

六月八日夕　天下茶屋集會所　竹内多聞報

兼題　汗

汗の香も氣にせぬ今の零落さ　路郎選
初戀は汗ばんだ手を取交し　堅坊
人前は大そうらしふ汗を拭き　內村
活け花を起すに幹事汗をかき　天坊
（軸）この汗がこれつばかしの金になり　一杉
兼題　十　九　路郎選
ことはりて今年十九で鳧がつき　美濃部
年は十九戀の家出と書てある　蛙水
嫁は十八娘は十九にて　福田
貸屋欄十九の娘見のがさず　格子郎
十九と聽いて仲居へ一つ酌し　萬年青
四五人の十九に花の咲いたやう　多聞
物かずを言はなくなつてきた十九　同
氣苦勞をかけて十九は痩せてゐる　一杉
石段を上る姿も十九なり　同
親類が先に貰ひに來た十九　貴山
うなづいておれば十九の娘なり　同
灯のついた事も十九の淋しふて　同
（軸）あの女この女みな十九なり　路郎

席題　尺　八　互選

尺八を吹くは下宿へ殘つてゐ　瓢霞樓
腔の疵尺八の音に痛みだし　末廣
人中で吹けぬ尺八聞かせられ　堅坊
尺八は月の出る方へ向いて吹き　黑天子
嫌はれてゐる尺八は冴えて來る　一杉
寶刀のやうな尺八さげて出る　貴山
尺八をすてゝ自炊にかゝるなり　路郎
尺八を覗いてゐるは吹けぬなり　同

席題　極　道　互選

眞新の下駄で極道やつて來る　多聞
極道は季せつ〳〵のものを着て　一杉
深切な人を極道持てあまし　同
極道の靴へ妹蹴つまづき　青砂郎
極道へ抱かれて子供這ふて來る　同
極道の身を大阪で立て直し　瓢霞樓
極道のぢつとしてゐて案じられ　一杉
極道のその器用さを惜がられ　路郎

五句集　先　妻

（九點）先妻の子はうつむいて食がすゝむ　樂亭
（同泣かしてるとばかり先妻思つて　貴山
（七點）先妻の里からとゞく柏餅　萬年青
（五點）先妻の頃は流行つた店であり　一杉

美靜流居句會（島根縣）

七月二十三日夜　原美靜流報

今日も又よめ入りを見る友の家　福長
俺一人唄つて今日も淋しいぞ　丈夫
星一つ出て自分をながめてる　武信
せみの聲きいて夏の日涼しまれ　康夫
若人の元氣は夏の畑け打ち　美靜流
柳友諸兄よ此の會を盛んにせんが爲通信を乞ふ　島根縣簸川郡鰐淵村大字河下　原美智造宛

阿波座句會（大阪）

松盛琴人選

小娘へ浴衣の似合ふ夜が來る　ひかる
色褪せた浴衣へ糊をきつう着る　四五磨
暗がりの中に浴衣は動いてゐ　大地
號外は隣りの方へ先に入れ　同
行水のあとに浴衣でよみがへり　五笑
さつき褪せ浴衣ちらほらする夕べ　雪松

手拭琴人選

手拭を忘れて風呂の後戻り　四五磨
舞の手のあるは手拭持つてゐる　同
食堂でむし手拭に面食ひ　五笑
優勝でもろうたタオル長いなり　雪松
頰冠りだけがソヨ〳〵動いてゐ　大地
手拭は雜巾ほどによく使ひ　同

ふあうすと小集（神戸）

山本淨平報

七夕の夜

裏長屋中にでつかい笹がある　清
失戀の振りさけ見れば天の川　山都
七夕の笹買ふてやり書いてやり　素生
かさゝぎのはかない戀に身をたさゝ　淨平
京の灯を遠く流れて天の川　同
七夕にふと行詰る筆をなめ　紋太
涼しさが口に出るほど海近し　同

琴人居倡會（大阪）

松盛琴人報

奥の院眞夏扇子は腰にさし　四五磨
夕涼み扇手で落語まれてゐる　素郎
腰さげのあひだから出す絹扇子　壽枝女
子を負ふてまだ夏密柑もたされる　琴人
忠孝の二字も古びて秋扇　同

電氣句報柳壇句報（大阪）

安井ひろし選

値切つた植木枯れて居る　俊烈
何心なく戻れば見合すんでゐる　ゆづらん坊
連中の一人どこかで泊つて來　太路
水車浮世を呪ふ日もあらむ　花情
みさりをさせるためにうんだのか　同
悠氣しつゝ五人の母になつてゐる　同

本柳壇は今回で一時募集をうち切ります。

名賀壽例會（尼崎）

於大物區集會所

七月十四日

席題　淺　墓　互　選

淺墓な女の智惠に甦り　亮山
計畫に女は女だけの智惠　稍風
太桑へ來て淺墓な娘なり　東北
南洋へ行く氣の給仕ムキになり　四方路
淺墓は今宵限りの酒に醉ひ　陽喜亭

席題　ビール　陽喜亭選

ビールなら一つは受けろ嫁であり　突支坊
一本のビールの余る獨りきり　素女
隙し藝ビールの瓶が持ち出され　壽郎
惜し氣なう女給ビールをつぎこぼし　吉朗
ビール瓶隣りの井戸に賴まれる　虚白
南瀛のジョッキに醉ふた戒ばし　蟬古
（人）風鈴の下でビールのつめを拔き　丸葉
（地）ジョッキに浴衣の袖をまくり上げ　東北
（天）ビールのポスター大腹を書き　柳笑
（軸）冷え切つたビール兎に角肌を脫ぎ　陽喜亭

席題　登　山　壽郎選

汗拭いて見上げる峰のまだ遠く　玄洋
頂上へもう四五丁の汗を拭き　稍雨
（佳）靴ずれの明日を氣にして室の宿　双光
（佳）頂上で大平洋に呼びかける　觀月
（佳）登山服改札口を反り返り　明果
（佳）八合目小癪なモガに追ひ越され　東北
（人）登山服まだ〳〵飲まぬ水と決め　四方路
（地）こだまする歌を登山は嬉しがり　苦香瀧
（天）險しさの崖にロープのみ延び　陽喜亭
（軸）ポスターデ見る山登り雲を書き　壽郎

席題　花　火　突支坊選

宿題の窓から遠く花火の火　玄洋
末の子は花火へ末練殘して寢　きくを
落成の花火に解雇舌を打ち　苦香瀧
市になつた今日も花火が鳴り續き　双光
いゝ娘見花火が追ひかけて見せ　東北
戰勝の意氣を花火に揚げて見せ　若水
（人）夕涼み花火線香へまるく居る　柳堂
（地）花火フト山の姿を見せて消え　壽郎
（天）背の兒を起す花火がきえかゝ　丸葉
（軸）見詰てる次の花火の待遠し　稍雨

席題　水　突支坊選

（佳）空梅雨に水車動かぬ日が續き　陽喜亭
（佳）水の面ぢつと見つめて月を見る　觀月
（佳）水車子守の唄に廻つて居　虚白
（佳）水仕事此頃嫁ぐ日をさとり　双光
（人）登山家の耳へ流れてくる清水　丸葉
（地）醉醒めの水へ女房の愚痴をき、　宙外
（天）水々今赤道を通るなり　柳堂

兼題　夕　涼　み　四方路選

遊ばせて食はす亭主と夕涼み　秀聲
夕涼みこゝら一面墓でした　十五夜
盛り場の天が明るい夕涼み　觀月
素通りはさせないと云ふ涼臺　迷砲
（人）夕涼み離れて亭主抱いて居る　虚白
（地）ありつたけコードを伸す涼み臺　柳堂
（天）涼み臺陽氣な男蚊に喰はれ　素女
（軸）夕涼み朝顔誰か踏んで行き　四方路

兼題　疵　東北選

（佳）傷はつかぬが診斷書を取る　觀月
（佳）笑ひ顔ゆがんで見える口の疵　斧葉
（佳）かすり疵させて子守の落ちずけ　陽喜亭
（佳）子の疵を大仰に聞く神親　迷砲
（佳）すり疵は泣かぬ男の子にさわる　丸葉
（人）生疵ドコレマダヤサシ支那奇術　萬樂
（地）看護婦さ笑へる程に疵が癒え　夕鐘
（天）この腕に墓の油の疵だらけ　十五夜
（軸）壜の疵巡査ラムネを振り直し　東北

杭全町 MEMO

二柳子

▲北國柳壇の重鎭窪田銀波樓氏が 今回本社客員たることを御快諾下さいました。

▲同人岩本素人氏は休暇で 夫人武子女史同伴八月十四日來阪され 直ちに本社及び同人諸氏を訪問されました。

▲同人小川三猿堂氏(別府)、七月廿日頃來阪され萬よし居を訪問されて 歸府されました。

▲社友六角桂風氏 今回獨立で製藥販賣業を開業されることになりました、隆盛を祈ります。

▲社友櫻井圓角氏は 八月十二日高野山へ登られ「陽も弱く葉末の搖れる高野山」の句を寄せられました。

▲社友越田久水氏幹事となり 八月十八日午後二時より高岡川柳大會を 高岡市外梶料理店で催されました。

▲岸本水府氏が 商用で大連方面へ旅行されたのを機會に 大連各川柳會の有志で八月十日午後六時より 大連中央公園內南華園で歡迎川柳大會を催されました。

▲山本雨迷氏は七月廿六日 北アルプスを横斷されました。

▲福田鶴峯氏は七月廿一日 男の子をもうけられました、母子ともに壯健で喜んでゐられます。

▲宮村柳月坊氏は 少年團野營敎導のため北國片山津溫泉に行かれ「藥師堂に着いてこゝから町を見る」の句を寄せられました。

▲舊同人吉川啞人、竹田芦穗氏が九月號の編輯當日移轉後 始めて事務所を訪れられた。

▲毎年鄕里へ行くことにしてゐますので、本年も七月廿九日の夜急行で 子供だけを連れて歸りました。夜ごうし列車の蚊になやまされ子供が寢返りするので一睡もせず 金澤驛へ降りました、しかし里から二人迎ひに來てゐたので子供は大喜びでした。

廿一日の日暮れに 宮保村の双葉吟社の宮村柳月坊氏を訪れた處が 當日丑の日で海水浴に行かれ疲れて寢てゐられたので 呼んでも返事がない、しばし待つてゐると女學校から歸られた妹さんが 起して下され直ちに初對面の挨拶をして 柳壇の近況を語り今後川柳雜誌社のため 永遠に努力致すことを約されました。見送りをうけて次の列車で片山津溫泉湯の出旅館で一泊。

一日夜、小松支部幹事の本田柳一路氏を訪れ近頃の小松柳界の隆盛など承り 當夜上野錦水氏、梶井非々樓氏のあつせんで同町の白山亭で歡迎會を開いて頂いたが、終列車の都合で早く退座して 小松驛まで松雪堂氏に見送られ山中溫泉よしのやで一泊。

二日夜、金澤支部幹事中川眼隧子氏を訪れやうとしてると 淺野川大橋詰で 突然 清谷旭洋氏に聲をかけられ、同氏の道案內で眼隧子の宅へ着し、眼隧子氏から金澤柳壇の近況を承り金澤柳壇の鏘々たる中柳二郎、宮本銀砂子、淺村紅の花、比賀すみ三、殘月の諸氏の集りで一夜句作もせず愉快な柳談にふけり、後宴會まで催して貰ひました。當夜十二時すぎ諸氏と別れて假の宿へ歸りました。

三日歸阪、直ちに本社主催の洲本吟行に參加し、吟行は近來にない盛會振りでありました

▲本號の編輯は八月十八日路郎主幹、双葉子町二、雨町、亂耽、琴人、素人、ひろしの諸氏と私とで致しました。

移轉

▼岩本素人氏は松山市港町四丁目一六四▼西原柳雨氏は東京市外中野驛前一〇八▼三好革郎氏は兵庫縣川邊郡雲ヶ雀片岡別莊▼六角桂風氏は 大阪市西成區鶴見橋通六丁目三▼上刀三氏は阪神沿線今津町津門▼小川三猿堂氏は別所市行合町仲間通二丁目▼池田雪峰氏は三重縣飯南郡櫛田村豊原▼松並光哉氏は 大阪市東成區南生野町二ノ四九▼佐々木三福氏は大連市桃源臺一五〇 いづれも各轉居

新誌友

「川柳雜誌」半年分前金壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友として こゝに芳名を錄します。(四年八月十八日まで)括弧內は紹介者

新谷庄吉(長崎柳秀)藤井勇美(松丘町二)石黑易二(廉生路郎)荒井英賀夫(中見光路)山本犀藏(萬よし)岩崎義彦(若井たけし)西村山月 橋本二柳子)佐々木三福、竹本竹二增位貞汀、上岡余里雄、八木佐顯、西森蝸牛、鹽田素崩、清水卯三(本社事務所)

(括弧內は紹介者)

編輯後記

▼本號も原稿が輻輳した。この暑いのに原稿が輻輳するといふことは大きなよろこびである。

▼八月四日に本社主催の洲本吟行があつて自分も出かけてあちらの海で泳いで來た。壽枝子女史も海岸に洋服を脱き棄てゝ海に入つた。なか〳〵勇敢である。孥人君も海に浸つて、はしやいゐでた。柴舟君も泳いだ。翠夢君も泳いだ。私等は三熊山の方を斷念して、海の方で遊んで來た。清君は砂の上で私たちの衣類の番をしながら煙草をふかしてゐた。それは子どもの時分に兄が泳ぐのを上から見てゐる弟のやうでもあつた。のんびりとした清遊だつた。海から出てから、街の方をぶら〳〵歩いて見た。お土産に鳴門密柑を籠に入れて賣つてゐる。夏密柑よりも肌が荒らいので一寸手が出ないが、さうした情景が私達の心をいかにも旅に來たやうなこゝろもちにさせた。洲本のことは他の人達が書いてゐるから、これ位にしておこう。

▲十日に神戸支部主催で青明忌を修した。例によつて多數の參會者があつた。私も出かけた。本社からはひろし君が出掛てゐた。紋太君が「神戸と青明」といふ話をしてくれた。自分も「青明の事ども」といふ話をした。この日に私の近業である「川柳漫談」が世に出た。青明忌に私の著書が出るといふのも何にかの因緣があるやうな氣がした。名古屋へ出張するといふ山雨樓君が出席してゐたなどもうれしかつた。この夜、新社友で神戸支部に屬する市公君に逢つた。ひろし君、里十九君、石竹君、觀月君等と阪急で川柳を談りながら歸つた。

▼至誠川柳會が十二日の夜に濱寺の臨海倶樂部で開かれた。朝陽、多聞の重鎭に、貴山、青砂郎、一杉、五輪その他の新進々廿幾名で頗ぶる盛會であつた。朝陽君相變らず快活な調子で「昨日母親がそを連れて福岡から飛行機で飛んで來ましてな」と談してゐた。朝陽君も昨年だつたか臨海飛行機で氣焰を擧げてゐたが、その母だけあつて鄕國福岡から旅客機で飛來されたさうである。壯なりと云ふべしだ。福岡から大阪までが二時間半に短縮されたのである。

▼十四日にアートを連れて奈良へ行つた。學校の先生の案内で奈良の街を歩く。アートに大佛を見せたり、柱の穴をぬけさせたりした。奈良はいつ行つてもいゝ處だ。大佛の鐘を鳴らしてから、二月堂の前で朝陽君の家族連れに呼びかけられた。飛行機で福岡から來阪されたおッ母さんも一行のうちにゐられた。

▼十五日の午後に松山の素人夫妻の來訪をうけた。僕が玄關に出たら素人君の半白が第一に眼に映つた。僅に半歲足らずではあるが懷しかつた。すぐに引つぱりあげた。二階で呑みながらいろ〳〵と談した。松山の柳友たちの噂も次から次へと聞かせてくれた。みんな達者らしいので嬉しかつた。

▼十六日の夜にひろし居で月評會があつた。集つた人々は紋太君、山雨樓君、素人君、孥人君、亂耽君、主のひろし君、お客さんとしての有陀君に僕を加へて八人でかなりの賑やかさであつた。私はふと昨年の今月今夜を思ひ出した。私の宅で月評會があるのでみんなに集つてもらつてゐたが、自分は急に北海道へ行くことになつてその夜の月評會には加はらずに中座してしまつたことを談したところが、恰度その時の人々の多くが今夜も集つてゐることなどが一層お互ひをうれしくさせた。ひろし君は連日の野球見物で疲れてゐるので今夜はあまり多くを喋べらなかつた。その云ひ草が面白い。選手は一日に一遍出ればいゝのだが私等は三遍見なければならぬのでそのくたびれ方は大變なんですとのこと、ものも考へ方によればどうとでも考へられるものだと思つた。

▼十八日編輯で事務所へ行き二階へ上ると舊同人の啞人君（目下山口縣久賀町にゐる）と芦穗君とが珍らしい顏を見せてゐる暫くと話してから二人は歸つた。

▼原稿はかなり輻輳するが、面白い原稿なら此の上にもお願ひしたい。ビルディングの原稿も隨分集つてゐるが輕いものが比較的少ないので失望してゐる。人身攻撃はさけてほしい。批評と人身攻撃とを混同する人々が時折出て來るが、さうしたことはこのビルディングではうけつけないことにしてゐる。

▼我が社にとつて二柳子君の健康であることは大きな强味である。金澤方面へ出かけた足で洲本吟行へ斷け戻つて名幹事を發揮してくれる。船の混雜中にもなほ川柳雜誌社席がとれるんだから幹事の神樣であらうと思ふ。

▼九月は柳珍忌がある。柳翁忌がある。八月の埋め合はせに九月はお互にウンと作句に精進したいものである。（路郎生）

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第六卷第十一號課題

九月五日締切
（各題十句以内）

▼助手　川村花菱選
▼男親　庄萬よし選
▼洋裝　松盛琴人　水谷鮎美　共選

第六卷第十二號課題

十月五日締切
（各題十句以内）

▼就職　岩本素人選
▼外人　佐々木三福選
▼釘　中川眼隧子　友淵貴山　共選

毎號募集

▼近作柳樽（拾句迄）麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號　一部　金參拾錢
新年特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號　一部　金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）　壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）　參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも貰ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は豪新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和四年八月廿五日印刷
昭和四年九月一日發行

第六卷第九號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（國館）
石堀（石川縣小松）マロト屋（京都）三宅（松山）弘文舍

川柳雑誌社關係の人々（順はろいい）

賛助員

大阪市南區新戎橋南詰　道頓堀支部　幹事　庄万よし
大阪市北區北森町三十二　天滿支部　幹事　北山悟郎
大阪市外高石町羽衣　濱寺支部　幹事　太田朝陽
神戸市花隈町九六　神戸支部　幹事　楊井二南
山口縣山口町石原小路　山口支部　幹事　柳川洲馬
東京市外杉並町高圓寺八二三　東京支部　幹事　岩崎柳路
函館市青柳町五〇　函館支部　幹事　亀井花童子
朝鮮仁川仲町一丁目八　仁川支部　幹事　矢田冷刀
松江市　松江支部　幹事　堂形奥田雪緒
小松市猫橋詰　小松支部　幹事　石川縣小松町本田柳一路
高知市本與力町　高知支部　幹事　中澤濁水
大阪市北花區龜甲町二丁目七九　梅田支部　幹事　水谷鮎美
大阪市外阪急沿線刀根山病院内　螢ヶ池支部　幹事　牧田普門
金澤市木綿町五五　金澤支部　幹事　中川眼隱子
大阪市東區糸屋町二丁目七　糸屋町支部　幹事　川合舟々
和歌山縣田邊町幽靈松下　和歌山支部　幹事　辻左馬
島根縣簸川郡高松村　簸川支部　幹事　伊藤緑之助
豐橋市外牟呂二二一　豐橋支部　幹事　白井梅里
神奈川縣平塚町旭座前　平塚支部　幹事　酒井駒人
兵庫縣加古川町大川町　加古川支部　幹事　水田桐郎
京都市七條大宮東入　京都支部　幹事　桑原京郎
山口縣防府町宮市八王子町　富岡支部　幹事　兼重白鷗
鳥取市川端町一丁目　鳥取支部　幹事　中島鐵洲
大阪市東區北濱一丁目　北濱支部　幹事　谷村稔
別府市行合區仲間通二丁目　別府支部　幹事　小川三猿堂
堺市大町西三丁目十三　堺支部　幹事　友淵貴山
松山市外祝谷　松山支部　幹事　淺井冷々子
大阪市外守口町車庫裏　守口支部　幹事　田新水朝
大阪市東區農人橋二丁目二六　御旅支部　幹事　櫻井圓角
富山縣高岡市坂下町　高岡支部　幹事　越田久水

客員

伊藤彦造　末弘嚴太郎　赤井清司　藤本卯之助　藤村作郎　國枝史　長崎柳秀　田中香涯　田中辰二郎　嘉納純　片岡直方　岡本一平　大道弘雄　池澤樂居
相森元紋太　東子魚二　蛭子省雨　篠原春舟　柴谷柴　木村半文錢　小前田出雀重郎　田榴　安達川久流美　田銀波樓　吉田清平　岡鳥　川村花菱　川上三太郎　岡田三面子　西原柳雨
大島濤明

社友

中見光　中澤濁水路　中野柳陽　中川眼隱子馬　辻左稔　谷村重白　兼若井たけ鷗　和田源貴山し坊　友淵蝶　土井貴文　平田櫛雨　西村市公　本田柳一越　六角桂風路　池田雪峰　生田翠夢
奥田雪緒　桑原京郎　近藤テルホ　柳川洲馬　楊井久二南　田村杏三水　越西安阿蝶　木山青砂郎　牧田普門　水谷鮎美　梅田桐五輪郎　田井翠峯　輪田梅里　水井光風　清白嶋
伊藤緑之助酒井駒人　岩崎本素人淺井冷々子水　岩柳路朝田新郎　伊藤崎愚陀北山悟鮎美　長谷川一徹風庄水谷萬よし　原史　谷川朝陽　太田三猿堂　小川合舟々　龜井花童子　川本二柳子　石川双葉子　橋本安井ひろし　高見柳かほる　高橋　竹内多骨　中島鐵洲　矢田冷刀　越藤村里加好香古主麻生幹路郎

編輯局（同人）

古本屋時代

今のやうにあとから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

清酒

午後六時 白鶴が待ち 妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

川柳詩壇の巨人 麻生路郎氏著

川柳漫談

吉岡鳥平氏挿繪
柴谷柴舟氏挿繪

最新刊

四六版・三九一頁
美裝・函入
挿繪六十葉
定價 金壹圓五拾錢
送料 金拾貳錢

著者は至つて眞面目な人、而もその語るところ飄逸に辛辣に眞にユーモアの神髓を掴む。空前の快著！

本書の扉に著者のサイン御希望の方は「川柳雜誌社」の方へ直接御註文を願ひます

本書の内容

川柳漫談 膳の緒、盲人の徽章、蛙、夫婦喧嘩の解剖、都會地獄、君も僕も死ぬ話、レディーメードの書置、戀を追ふ一人者、指切、鼠、盜人、女の三十、賽錢、重役、フアプルの糞の外交、幽靈の靴、近眼の微苦笑、傘の行衛、猫の寫眞、愛の巢、保險屋と新聞屋、贋趣味、床下の佛像、無口、附貸の犬、鼻の修業、なりさがり魂、校長さんと煙草、私の墓

川柳染ちがひ

一ト昔前の大阪見物

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和四年八月二十五日印刷納本 昭和四年九月一日發行

川柳雜誌（第六十八號）

定價三拾錢

發行所 弘文社

東京市下谷區御徒士町二丁目一九
振替東京七二二三三番
大阪市東區備後町一丁目三番地
振替大阪一一三六〇番